

# 聴覚障害学生サポートネットワークの 構築をめざして

アメリカ視察「高度専門領域に対応した手話通訳者の養成Ⅱ」報告書



高等教育機関のアクセシビリティ向上を目指した  
筑波聴覚障害学生高等教育  
テクニカルアシスタントセンター構築事業

**T-TAC**

**PEPNet-Japan** 日本聴覚障害学生  
高等教育支援ネットワーク

本事業は、文部科学省特別教育研究経費（筑波技術大学／平成19年度～23年度）  
による聴覚障害学生のための拠点形成事業の一部です。



国立大学法人  
筑波技術大学



---

---

## はじめに

---

---

2000年代以降障害を持つ学生への支援が広がりを見せ、また、聴覚障害者の職域拡大により、学生が学ぶ分野も多様化してきた。このような中であって、学生の情報保障手段としての手話通訳へのニーズは高まりをみせているにも関わらず、その充実は立ち後れているのが現状である。この理由として、通訳者の絶対数の少なさもさることながら、通訳の質、ひいては手話通訳者の養成体制の不備が大きな壁となっていると言える。大学をはじめとした高度専門領域では、ある特定の分野の中からさらに焦点が絞られた内容がテーマとして取り上げられ、議論が展開される。当然、手話通訳者にもこれらの通訳を行えるだけの能力が求められるが、生活場面での通訳者を念頭においた日本の手話通訳者養成では、このような分野に対応することは難しいのが現状である。

一方、手話通訳者の養成レベルの高さで名高いアメリカでは、手話通訳者の養成は高等教育機関で行われている。これらの学校では、手話通訳が体系的に教えられており、その過程で手話通訳の評価も行われている。アメリカでの手話通訳者養成の実態は、2007年度視察報告書『聴覚障害学生サポートネットワークの構築をめざして アメリカ視察「高度専門領域に対応した手話通訳者の養成」』に詳しいが、今回はさらに、優れた取り組みを行っている養成現場を視察することで、高度専門領域に対応できる手話通訳者になるために必要な養成のプロセスを明らかにすることを目的とした。

今回視察を行った大学では、いずれも目指すべき手話通訳者像と、習得すべき能力が明確に示されていた。特に視察の前半に訪問したノースイースタン大学では、ディスコースの発達段階に基づいたカリキュラムを作成し、徹底した自己評価と技術分析によって、学生たちがステップアップしている様子が見られた。詳細は9頁以降にて報告しているため、ぜひご自身の目でお確かめいただければと思う。

我が国の手話通訳者養成課程が充実し、高度専門領域で通訳可能な手話通訳者が増えることで、それぞれの分野で自由に学び活躍する聴覚障害学生の姿が見られる日が来ることを切に願い、本報告書を発行する。

2010年6月吉日

筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター 准教授  
白澤 麻弓



---

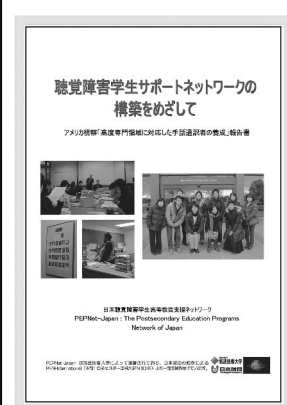
---

## 目次

---

---

- 第 7 回アメリカ視察「高度専門領域に対応した手話通訳者の養成Ⅱ」概要 . . . . . 4
- ノースイースタン大学における手話通訳者養成 I . . . . . 9  
ー 手話通訳養成課程の概要ー
- ノースイースタン大学における手話通訳者養成 II . . . . . 17  
ー 授業風景と学生たちー
- RIT における手話通訳者の評価について . . . . . 23  
ー 手話通訳の技能評価を中心にー
- 遠隔教育による手話通訳者養成 . . . . . 27  
ー 北コロラド大学 DOTI センターの取り組みー
- Front Range Community College を訪問して . . . . . 33  
ー デジタルラボを使った手話通訳トレーニングー
- Purple Language Services . . . . . 41  
ー Denver Communication Center にてー
- 手話通訳者の仕事とデマンドコントロール理論 . . . . . 46
- ～特別寄稿～ 音声言語通訳者から見たアメリカにおける  
手話通訳者養成とそれを取り巻く環境 . . . . . 56
- 巻末資料 . . . . . 61
  - ・ 視察資料の日本語訳にあたって
  - ・ Rubrics (ノースイースタン大学)
  - ・ Entry-to-Practice Competencies (北コロラド大学 DOIT センター)

	<p>なお、本報告書の内容をより深くご理解いただくために、PEPNet-Japan で実施した 2007 年度アメリカ視察「高度専門領域に対応した手話通訳者の養成」報告書をご覧いただくことをおすすめいたします。2007 年度の視察報告書をご希望の方は、下記 PEPNet-Japan 事務局までご連絡ください。冊子代および送料はかかりません。</p> <p><b>【お問い合わせ先】</b> 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan) 事務局 ホームページ：<a href="http://www.pepnet-j.org/">http://www.pepnet-j.org/</a> メールアドレス：<a href="mailto:pepj-info@pepnet-j.org">pepj-info@pepnet-j.org</a></p>
---	---

---

---

## アメリカ視察「高度専門領域に対応した手話通訳者の養成Ⅱ」概要

---

---

### 1. 視察に至る経緯

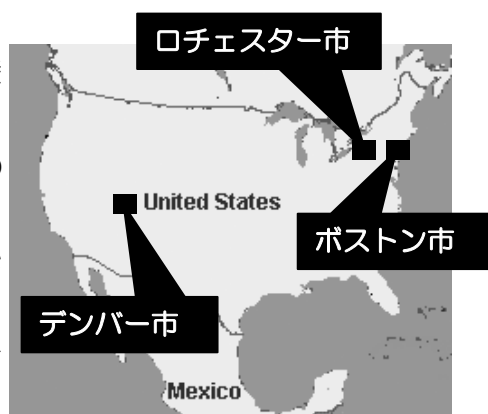
筑波技術大学障害者高等教育研究支援センターでは、聴覚障害学生支援のための拠点形成をめざして平成19年度より「高等教育機関のアクセシビリティ向上を目指した筑波聴覚障害学生高等教育テクニカルアシスタントセンター（T-TAC）構築事業」に取り組んできました。本事業は、聴覚障害学生支援に関するさまざまなノウハウを蓄積するとともに、他大学に対する情報発信を行うもので、聴覚障害学生支援に関わる大学同士のネットワーク形成や、新たに聴覚障害学生を受け入れた大学に対する助言・指導などを行うものである。

こうした中、本学が助言や指導を行ってきた高等教育機関においても、高度専門領域に対応できる手話通訳者を求める声があがる一方で、我が国では手話通訳者の養成が体系立てられて実施されているとは言えない状況が続いている。そのような状況に打開策を見いだすため、本学では、一定レベルの技術を持った手話通訳士の方にご協力をいただき、高等教育機関での高度専門領域に対応した手話通訳とは何か、それに必要な資質とは何かなどについて研修や研究を行ってきた。しかし、手話通訳者の養成を行っていく上で「手話ができる人」から「手話通訳ができる人」へ育てるための指導方法の確立については、依然として体系立てられていない面も多く、養成方法についてはそれぞれの指導者や手話通訳者自身の努力にゆだねられている状態が続いていた。

そこで本事業では、大学において手話通訳者養成課程を有し、高度専門領域に対応した手話通訳者の養成を行っているアメリカに渡り、実際の授業方法や教育環境についてより詳細な情報を収集することを考えた。

### 2. 本視察の目的と概要

本視察では、アメリカの中でも優れた手話通訳者養成課程を持ち、さらに優れた指導者のいる、ノースイースタン大学、RIT（ロチェスター工科大学）、NTID（国立ろう工科大学）および北コロラド大学を訪れた。ここでは、手話通訳者養成に関わる指導者に会い、お話をうかがうほか、実際の指導の現場を見学させていただくことで、今後我が国における高度専門領域に対応した手話通訳者の養成方法や養成課程の設置についての示唆を得ることを目的とした。



視察地、参加者並びに視察日程等は以下の通りである。

## 1) 視察地（主要な場所のみ）

## ・ノースイースタン大学【Northeastern University】

<http://www.northeastern.edu/neuhome/index.php>

1991年に手話通訳の学士課程（BS）、2005年には手話通訳者指導者養成の修士課程（MS）を設置している大学である。世界的にも有名な手話通訳研究者が中心となって作り上げた養成課程であり、他の音声言語と同等に言語学部にて手話通訳者養成を行っている点で特徴的である。2007年度にPEPNet-Japanが実施したNTIDの視察では、NTIDへRico Peterson氏に来ていただき、通訳者を目指す学生が手話を習得し、通訳技術を身につけるためのトレーニング法やカリキュラムについてお話をうかがうことができた。しかし、実際に大学の様子を見ることはできなかつたため、今回はノースイースタン大学へうかがい、実際に通訳技術のトレーニングを行っている様子を視察し、その指導を担当する講師陣や学生らと懇談を行った。さらに手話通訳を学ぶ学生がその身につけた通訳技術をどのように現場で発揮していくのか、仮の現場や実習から、実際の通訳現場へ移行する際の方法について、詳しいお話をうかがった。

## ・国立ろう工科大学【National Technical Institute for the Deaf (NTID)】

<http://www.ntid.rit.edu/aslie/about.php>

NTIDは、1968年に世界で初めて大学内に手話通訳者養成コースを設置した大学である。当初は、RIT内で行われる授業の通訳を担当する通訳者の養成を行っていたが、現在では、あらゆる場面に対応できる手話通訳者養成カリキュラムとなっている。また、学内には100名を超える手話通訳者がスタッフとして雇用されており、学生は実際に学内の通訳現場で実習を行いながら、実践的な通訳学習が可能な体制となっている。今回は学内で雇用されている手話通訳者のランクやスキルアップの方法、新たに手話通訳者を雇い入れる場合の評価基準などを中心とうかがい、さらに、大学の現場で活躍する手話通訳者を支える研修制度についてお話をうかがった。

## ・デフウェルネスセンター【Deaf Wellness Center (DWC)】

<http://www.urmc.rochester.edu/dwc/index.htm>（DWCトップページ）

[http://www.urmc.rochester.edu/dwc/edu/Control\\_Schema.html](http://www.urmc.rochester.edu/dwc/edu/Control_Schema.html)

（デマンドコントロール理論に関するページ）

本センターに所属しているDr. Dean、Dr. Pollard両氏は、手話通訳者の立場と役割について新たな枠組みを提唱している研究者である。これまで手話通訳者は「透明な存在に徹しなければならぬ」という見方がなされており、通訳者が現場でとる行動もこうした見解に縛られざるを得なかつた。しかし、両氏は「現場で通訳者の存在を消すことは不可能であり、通訳者の存在が場に影響を与えていることは紛れもない事実である」と唱え、「その場に通訳者がいることで生じる事象や、手話通訳者の役割について正面からとらえていく必要がある」と訴えている。本学が2008年度に行ったアメリカ視察ではこうした両氏の理論についてわずかながらお話をうかがうことができた。しかし、非常に短時間であっ

たために、今回改めてお話をうかがう機会を設け、実際に手話通訳者を対象に行うものと同じワークショップを受講させていただいた。

#### ・北コロラド大学【University of Northern Colorado】

<http://www.unco.edu/doit/home.html>

北コロラド大学が行っているプログラムの一つで、Distance Opportunities for Interpreter Training Center (DOIT センター) がある。この DOIT センターでは、手話通訳者になりたいと思っても、近くに手話通訳者を養成する大学・機関がない、または仕事や家庭の都合により大学に通えないといった人々に、オンラインで手話通訳者の養成を行っている。数少ないオンラインでの手話通訳養成がどのようなカリキュラムで、どのように運営されているのか、ディレクターの Leilani J. Johnson 氏らからご説明をいただいた。

#### ・パープルランゲージサービス【Purple Language Service】

<http://www.purple.us/p3/index.html>

パープルランゲージサービスは、デンバー市内にある手話通訳派遣エージェントである。これまでは手話通訳者の養成について目を向けていたが、ここでは、手話通訳を仕事としている人々について目を向けた。各大学などの手話通訳者養成機関を卒業後に、実際に手話通訳者として働く場合にはどのような人材が求められているのか、また仕事としてエージェントに登録されている手話通訳者達の研修制度がどのようなになっているのか、通訳の質を維持するために行っていることなどについてお話をうかがった。

## 2) 参加者

参加者は、高度専門領域に対応した手話通訳者を養成するために必要な知識・技能・条件などについて日頃から興味や関心を持ち、実践研究を行っている方で、今回の視察を通して、我が国における高度専門領域に対応した手話通訳者の体系立てられた養成カリキュラムや指導方法の開発が可能であると判断した方に依頼をした。

このうち国立障害者リハビリテーションセンター学院の木村氏および宮澤氏は、我が国でも有数の手話通訳者養成プログラムに関わる指導者で、手話通訳者の養成手法ならびに指導カリキュラムの構成等について高い技術と実績を有している。今後、本学でも高いレベルの手話通訳者を育て、現場に投入していくためには、こうした養成校における専門家と知見を共有していくことが不可欠と考え、是非ともご同行いただきたいと依頼をさせていただいた。

また、関東聴覚障害学生サポートセンターの吉川氏は、本学が実施する手話通訳研究において、共同研究者として活躍いただいているメンバーの一人であり、本学の手話通訳者研修会でも、聴覚障害当事者の視点から常に鋭い指摘をいただいている。

群馬大学障害学生支援コーディネータの中永氏は、日本で唯一専属の手話通訳者を設置している群馬大学で通訳活動を担っている手話通訳者である。数少ない大学現場で働く手



話通訳者のお立場で、今後の通訳者養成について貴重な意見をいただけることを期待しご参加いただいた。

なお、参加者という位置づけではないが、日英通訳者としてご同行いただいた近藤氏は、日本通訳翻訳学会の発起人の一人でもあり、我が国の通訳研究を牽引してきた第一人者でもあられる。

こうした方々とともに先進国における通訳養成現場を視察できたことは、今後高度専門領域における手話通訳者養成プログラムを作り上げていく上で、またとない機会となった。

参加者：

筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター 准教授 白澤麻弓  
 国立障害者リハビリテーションセンター学院 手話通訳学科教官 木村晴美氏  
 国立障害者リハビリテーションセンター学院 手話通訳学科教官 宮澤典子氏  
 関東聴覚障害学生サポートセンター コーディネーター 吉川あゆみ氏  
 群馬大学 学生支援課障害学生支援室 専門支援員 中永亜貴子氏

筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター 特任助手 蓮池通子  
 筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター 特任研究員 石野麻衣子

手話通訳者：

荒井美香氏  
 性全幸氏

日英通訳者：

近藤正臣氏  
 高木真知子氏

### 3) 視察日程

2009年1月31日(日)～2月8日(月)

### 4) スケジュール(主要な内容のみ)

日程	視察内容
2月1日(月) 2日(火)	ノースイースタン大学視察 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Dennis Cokely 氏・ Rico Peterson 氏との懇談</li> <li>・ 学内施設見学</li> <li>・ 手話通訳者養成コース授業見学 3クラス</li> <li>・ 手話通訳者養成コースの学生との懇談</li> </ul>

日程	視察内容
2月3日（水）	国立ろう工科大学（NTID）視察 ・ NITD 概要説明および学内施設見学 ・ RIT Interpreting Department 担当者との懇談
2月4日（木）	Dr. Dean & Dr. Pollard 両氏との懇談 ・ デマンドコントロール理論に関するワークショップ ・ 懇談および質疑応答
2月5日（金）	北コロラド大学 Distance Opportunity for Interpreter Training Center（DOIT センター）視察 ・ オンラインによる手話通訳者養成プログラムの概要説明 ・ カリキュラムと受講方法などに関する説明  フロントレンジコミュニティカレッジ視察 ・ 手話通訳者養成で用いられるデジタルラボの視察
2月6日（土）	パープルランゲージサービス社視察 ・ 手話通訳者の雇用や研修に関する説明 ・ 施設見学

#### 5) 付記

本事業は、文部科学省特別教育研究経費（筑波技術大学／平成19年度～23年度）による聴覚障害学生のための拠点形成事業の一部である。

---

---

アメリカ視察「高度専門領域に対応した手話通訳者の養成Ⅱ」報告書

---

---



---

---

# ノースイースタン大学における手話通訳者養成 I

## —手話通訳者養成課程の概要—

---

---

関東聴覚障害学生サポートセンター  
コーディネーター 吉川 あゆみ

### 1. はじめに

2007年12月に行われたアメリカ視察では、最先端の手話通訳者養成について学ぶ機会に恵まれた。「言語学科」において、「言語発達理論」に沿った手話通訳者養成を行う稀有な大学、ノースイースタン大学の Rico Peterson 氏を NTID (国立ろう工科大学) に招き、その理念やカリキュラムについての講義を受けた<sup>①</sup>。

今回の視察では、その充実した養成の実際を見るべく、ボストンのノースイースタン大学を訪問し、実際の授業を見学させていただいた。以下にご紹介する、Dennis Cokely 氏と Rico Peterson 氏をはじめ、多彩な講師陣と活気あふれる学生たちに魅了された2日間であった。



写真1 Northeastern 大学

### Dennis Cokely 氏

ノースイースタン大学 ASL (アメリカ手話) 通訳者養成コースディレクター。「手話は言語である」と提唱した William C. Stokoe, Jr.氏と共にギャローデット大学で教鞭を執る。ビデオプロダクション「Sign Media, Inc.」経営を経て、1996年ノースイースタン大学教授に就任。世界的に有名な手話文法テキスト「American Sign Language (通称: The Green Book)<sup>②</sup>」の著者の一人として知られる。



写真2 Rico Peterson 氏 (左)  
Dennis Cokely 氏 (右)

### Rico Peterson 氏

ノースイースタン大学 ASL 通訳者養成コース教員。ギャローデット大学教員、NTID 手話通訳者養成コースディレクターを経て2005年より現職。学部では手話通訳者養成を担当し、大学院では通訳理論と教育学を指導。

## 2. ノースイースタン大学手話通訳者養成課程の教育理念と特長

ノースイースタン大学の所在地、マサチューセッツ州ボストンは、100校以上の大学が立ち並ぶ学園都市として知られている。ノースイースタン大学では、約25,000人の学生が学んでいる。また、ボストンには200年近い歴史を持つデフ・コミュニティが形成されており、デフ・コミュニティとの強いつながりのもと、ノースイースタン大学では1991年に手話通訳の学士課程（BS）が設立された。2005年には学士課程カリキュラム再編成と共に、Rico氏を招いて手話通訳指導者養成の修士課程（MS）が設置された。

Rico氏曰く、「ノースイースタン大学の通訳者養成課程は非常にユニークで、アメリカの他のどこにも類を見ない方法」という。ノースイースタン大学の具体的な魅力は何か。その特長として以下の3点を挙げている。

### 1) 言語学部における手話通訳者養成

ノースイースタン大学の言語学部では11言語を扱っており、言語通訳の専門家としての手話通訳者という位置づけが設立理念の中にも記されている。「手話のみが独立してしまおうのではなく、他言語学の専門家と協同して学際的な研究や教育を可能にする環境が整っている」とRico氏は述べる。「手話は言語」と言われて久しいが、他言語に較べて何ら遜色のない言語として扱われている証と言えよう。



写真3 Cokely氏の研究室にある表札

### 2) 教育理念

ノースイースタン大学の教育理念は他大学のそれとは一線を画しており、「コミュニケーション能力」「社会言語学的知識（文化的理解）」が強調されている。かつてはデフ・コミュニティの中で自然に身につくものだったこの2つを、通訳者養成の哲学として掲げている。

### 3) Middler Year（中間年）を盛り込んだカリキュラム

大学では一般的に4年間のカリキュラムが組まれているが、ここではMiddler Year（中間年）を挟む5年間のオリジナルカリキュラムを導入している。これは、ASLに関する技術や知識を持たない学生が入学するため、2年間は手話通訳技術でなくASLのみを習得するためである。その後、いったん大学を出てデフ・コミュニティでの実地体験を1年間積み、残りの2年間でようやく通訳技術に着手する仕組みになっている。

表1 ノースイースタン大学における手話通訳者養成課程のカリキュラム概要

学年	Fall Semester 前期	Spring Semester 後期
Year One 1年次	Deaf People in Society：社会の中のろう者 Elementary ASL 1：初級 ASL 1 College:An Intro：教養 ENG111 College Writing：英語	Elementary ASL 2：初級 ASL 2 Core Elective：主要選択科目 College Mathematics：数学 Elective：選択科目
Year Two 2年次	Deaf Culture/History：ろう文化と歴史 Intermediate ASL 1：中級 ASL 1 Introduction to Linguistics：言語学入門 Core Elective：主要選択科目	Intermediate ASL 2：中級 ASL 2 Linguistics of ASL：手話言語学 Elective：選択科目 Elective：選択科目
Middler Year 中間年		
Year Three 3年次	Introduction to Interpreting：通訳入門 Interpreting Inquiry Texts：会話的通訳 Middler Year Writing：中間年報告 Advanced ASL 1：上級 ASL 1 Linguistics：言語学 Elective：選択科目	Interpreting Narrative Texts：物語的通訳 Contrastive Analysis：比較分析 Advanced ASL 2：上級 ASL 2 Elective：選択科目 Elective：選択科目
Year Four 4年次	Interpreting Expository Texts：論説的通訳 Ethical Decision-Making：倫理 Ethical Fieldwork：倫理 Research Capstone：論文作成 Elective：選択科目	Interpreting Persuasive Texts：説得的通訳 Interpreting Practicum：通訳実習 Elective：選択科目 Elective：選択科目

### 3. 手話通訳者養成コースの概要

#### 1) 教員構成

教員はフルタイムスタッフ 5 名、パートタイムスタッフ 5 名の計 10 名である。それぞれ、フルタイムスタッフのうち 3 名がろう者、パートタイムスタッフのうち 2 名がろう者というように、聴者とろう者のバランスがとれている。

#### 2) 学生

定員は 18 名で、12 名を超える場合は 2 クラスに編成される。現在の 4 年生 11 名のうち、編入生も数名おり、他大学を卒業後にコミュニティカレッジ等で 5 年間 ASL を学び、さらにこの大学のプログラムがよいと聞いて編入した男性もいた。

卒業後は全員が通訳者になるわけではなく、教師になる学生や家庭に入る学生もいるが、比較的スムーズに全米手話通訳者資格（National Interpreter Certification：NIC）に合格しており、例年 8 人前後が通訳者として活躍している。ノースイースタン大学に限らず RID（全米手話通訳者登録協会）支部や他大学にも卒業後の再学習の場が多く、通訳資格認定準備の講座や、専門通訳（医療、裁判等）のワークショップも行われている。

#### 3) コース編成

手話通訳者養成コースだけでなく、第二外国語として ASL を学ぶクラスもあり、他コースの学生が手話を学ぶこともできる。

#### (1) 第二外国語クラス

第二外国語として ASL は非常に人気があり、学内でも約 150 名が履修している。第二外国語 13 言語中、一番人気があるのはスペイン語で、次席を ASL とフランス語が争っており、現在 ASL は 3 位に収まっているとのことである。ろう者の教員 2 名と聴者の教員 2 名がチームで指導にあたっていたが、第二外国語クラスの人気が高いため、手話通訳者養成コースに十分な人手を割けないという嬉しい悲鳴を上げている。

#### (2) 他コースとの併行履修

ノースイースタン大学では ASL 通訳のコース以外に、演劇コース、対人サービスコース、心理学コースも併設されており、2 年次までは手話通訳者養成コース生とこれらのコースの履修生が共に ASL を学んでいる。「心理学と ASL の両方を学べる大学を探してここに入った」という学生もいた。3 年次からは各コースに散り、手話通訳者養成コースのみの学習となる。

それゆえ、「この学生は手話通訳に不向きでは」というようなケースに出会った場合は、3 年次から別コースでの履修を勧める例もあるという。

### 4. 新カリキュラム導入と言語発達理論に基づく ASL 通訳者養成

ノースイースタン大学では、「手話は言語である」という前提に立ち、言語発達理論に沿ったカリキュラムが組まれている。旧来のカリキュラムとはどのような違いがあり、学生にどのような変化が生まれているのだろうか。

#### 1) 旧カリキュラムとの違い

##### (1) クォーター制からセメスター制へ

ノースイースタン大学では 1978 年より ASL 指導を開始し、1983 年には手話通訳者を養成するためのクラスがスタートしている。前述の通り 1991 年には学士号が取得できるコースが設置された。2003 年には全学的なカリキュラム変革が行われ、クォーター制（四期制）からセメスター制（二期制）へ移行した。かつては短期間で授業展開を迫られたが、セメスター制以後は時間の余裕が生まれ、養成の質の向上につながっている。

##### (2) 卒業生調査に基づく新モデル導入

セメスター制移行時に、手話通訳者養成コースでもカリキュラムが大幅に見直された。マサチューセッツ州では、手話通訳資格審査や雇用は州の聴覚障害委員会に諮ることになるが、大学からその委員会に調査を依頼した結果、通訳技術習得には言語発達理論の 4 段階が該当することが明らかになり、新モデル導入へと至った。政府指定の最低基準を満たしつつ、独自のプログラムを組んでいる。

旧カリキュラムは翻訳から逐次通訳へ、逐次通訳から同時通訳へ、そして同時通訳から会話通訳へという段階での学習となっており、多くの大学の主流カリキュラムでもある。

新カリキュラムでも翻訳や逐次通訳、同時通訳を扱っているが、ディスコース（談話）段階の各段階にそれぞれ取り込まれる形となっている（表2）。

そのため、学生からは、「他大学でも ASL を学んだが、この大学で初めて英語を聞いたりスピーチしたりとディスコース理論に基づいて学んだ」という声も聞かれた。

表2 言語発達段階に基づく手話通訳の学習内容

時期	段階	内容	学習の流れ	学習例
3年 秋期	①質問的談話	一対一での簡単な会話、 短い質疑応答	英語分析 ASL分析 比較	受付対応、病院予約、就 職面接等
3年 春期	②物語的談話	ある程度まとまっていて ストーリー性のある話	英語分析 ASL分析 比較	学生が自分の経験を英語 で語る→ASLで語る→ 比較
4年 秋期	③説明的談話	客観的で論理的思考を伴 う説明	英語分析 ASL分析 比較	大学講義、ジョブトレ ニング等
4年 春期	④説得的談話	①～③を駆使し、かつ相 手の感情を動かす話	英語分析 ASL分析 比較	英語での説得スキルを抽 出、分析→ASLビデオ でも抽出、分析→比較

## 5. 新カリキュラム導入によるさまざまな変化

新カリキュラム導入によって、さまざまな良い変化がもたらされた。その中でも特筆すべきものを以下に挙げる。

### 1) 学生の意識の向上

改革後は学生がコースの目的をいっそう理解しており、学生の勉強の仕方が大きく変わっている。「Rubrics（ルブリック）」と呼ばれる評価シート（64頁参照）を用いた自己評価を繰り返し行い、自らの気づきを促すように導いている。RubricsはRIDの通訳評価基準をもとに再編成されており、「言語のマッチング」「目的に対応した処理」等の10の大項目を、それぞれ4段階で評価する仕組みである。自分の得意項目や苦手項目が明確になるため、学生が今学期はどこに重点を置くかという目標を自ら設定したり、達成度をはかったりする際にもRubricsが大活躍する。

### 2) 「言語」を評価する視点

通訳評価の際、言語力と通訳技術とが混同されがちだが、ここでは「言語力」と「通訳技術」を分けて考えるため、「通訳」ではなく「言語」を評価しようという視点が生まれる。先生と学生で話し合うにあたって評価シートを用い、視点を絞ることで言語的ツールを共有できるため、議論がスムーズになった。また、教師が学生を評価する際にも先述のRubricsが登場し、系統立った通訳評価の積み重ねが意識されていることがわかる。



### 3) 新教材の開発

1～2年次のASL学習時は「Signing Naturally<sup>®</sup>」「The Green Book」を使用するが、3～4年次の通訳技術学習時は従来のテキストが適合しないため、教材を自作し、蓄積する必要に迫られている。とりわけ質問的通訳段階と説得的通訳段階の教材が不足がちであり、ここからも旧来のカリキュラムとの差異がうかがえる。

### 4) 教員の認識の向上

学習過程が明確になり、かつ指導法も教材も既存のものが通用しないことにより、教員にも緊張感と責任感が増している。

## 6. おわりに

築100年というレンガ造りの言語学科オフィスに案内してもらい、壁一面のビデオストックなどを拝見した。その折、現在取り組んでいる新事業に話が及んだ。それによると、南メーン大学、ニューハンプシャー大学、東ケンタッキー大学、聖カタリナ大学、NTID、ノースイースタン大学の東部6大学（公立3大学、私立3大学）で協定を結び、過去十数



写真4 言語学科のオフィスが入っている建物

年の通訳者養成コース卒業生調査の追跡調査を実施中とのことである。簡単すぎず難しすぎない題材を選んで通訳してもらったものをビデオに収め、①他言語習熟に対する柔軟性、②ストレス耐性テスト、③異文化への許容度、を比較している。ここから、技術が上達したのはデフ・コミュニティとの結びつきが強いためなのか、寮生活中心の方がスムーズに手話習得できるのか等を分析していくという。

「聴覚障害学生支援＝大学における手話通訳者養成コース設置」と認識されているアメリカではあるが、なんというスケールなのだろう、と改めて驚愕させられた。ノートテイクやパソコンノートテイク等の多様な手段での支援も貴重で不可欠だが、聴覚障害学生支援の中心をなすのは「手話通訳」であること、聴覚障害者が自立して専門職として働くには大学での手話通訳者養成と雇用が基盤となることを、アメリカを視察させていただく度に痛感している。ここにこそ、日本の我々がぶつかっている壁を乗り越える鍵があるように思う。最初の視察で目にしたように、日本にも、手話で議論をこなす教員やコーディネーターの増える日が遠からず来ることを願いたい。

① 吉川あゆみ「アメリカにおける手話通訳者養成の動向とノースイースタン大学の取り組み」『聴覚障害学生サポートネットワークの構築をめざして－アメリカ視察「高度専門領域に対応した手話通訳者の養成」報告書』24-35頁、2008、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク

---

② ASL 教師のための初の手話文法テキスト。

Charlotte Baker-Shenk and Dennis Cokely *"American Sign Language: A Teacher's Resource Text on Grammar and Culture"* Gallaudet University Press, 1991

③ アメリカでポピュラーな手話学習テキスト。

Cheri Smith, Ella Mae Lentz, Ken Mikos *"Signing Naturally Level 1-3"* Dawn Sign Press, 2003

---

---

## ノースイースタン大学における手話通訳者養成 II

### －授業風景と学生たち－

---

---

国立障害者リハビリテーションセンター学院  
手話通訳学科 教官 木村晴美  
宮澤典子

#### 1. 授業風景

ノースイースタン大学は、そのカリキュラムをアメリカの他のどこにも類を見ないと自負している。カリキュラムは言語発達理論に基づいており、1・2年次では徹底してASLを教えられ、一定レベルに到達した学生だけが通訳トレーニングを受けることになる。通訳トレーニングもディスコース発達に基づいており、3年次秋学期から4年次春学期までに、①質問的談話の通訳 ②物語的談話の通訳 ③説明的談話の通訳 ④説得的談話の通訳と段階を追って授業が展開されている（14頁表2参照）。視察時の大学は春学期だったので、残念ながら秋学期に行われている①③を見学することはできなかったが、今回見学した②④を含めいくつかの授業風景をご紹介します。

##### 1) 物語的談話の通訳 (Interpreting Narrative Texts)

当授業は3年次秋学期(後期)に行われる。

3年生は7人(男性3人・女性4人)で、日本に比べ男女のバランスが良い。男子学生が多いことから、アメリカにおける手話通訳の職業的認知、社会的地位の高さがうかがえる。

授業は、学生や教員のリードで緊張をほぐすリラクゼーションから始まる。学生はさまざまなリラクゼーションの方法を見つけ紹介しなければならない。手話通訳は緊張を強いられる仕事で、自らをリラックスさせるのは通訳者として必要な技術だ。

リラクゼーションで緊張をほぐした後、い

よいよ「物語的談話の通訳」の授業に入る。この日は、直近の2週間で自らが体験したことを英語で発表するものであった。次回は同内容をASLで発表することになる。2つの言語で語ることによりそれぞれの特性を対照分析し習得させる狙いがある。

発表は、小学生向けや高校生対象など、聞き手や場面を想定して行われる。アメリカではスピーチ技術が重んじられており、小学校低学年のころからスピーチ力を高める授業が



写真1 物語的談話の通訳トレーニング  
中央が発表者、両脇に通訳する学生

取り入れられている。そのためか、当授業における発表も堂に入ったものであった。

この日は、視察団のため特別に学生による手話（ASL）通訳がついた。まず、発表前に発表者と通訳者、教員を交えて 2 分間の打ち合わせが行われる。打ち合わせでは、発表の内容・聞き手・用語などについて確認を行う。その日は通訳トレーニングが主たる目的ではなかったが、学生はマイカメラ（ハンディ・ビデオカメラ）で自らの通訳の様子を撮影していた。常に自分の通訳を振り返る習慣がついているようだ。また、学生の通訳を見ると ASL 習得度が高いことがわかる。NMS（非手指動作）をはじめ行動 RS（リファレンシャルシフト）や引用 RS など、ASL 文法も十分身につけていた。

## 2) 説得的談話の通訳 (Interpreting Persuasive Texts)

当授業は 4 年次秋学期(後期)に行われる。

4 年生は 11 人（男性 3 人・女性 8 人）で、基本的に 2 クラスに分かれて授業が行われるが、時には教員が交代したり合同の授業が行われたりすることもある。今回は 2 クラス合同の授業であった。

「説得的談話の通訳」の授業は、ASL による説得的談話を論理的に分析することで、ろう社会で用いられる説得スキルを習得させる目的がある。授業にあたって、学生はろう者の説得的談話の動画をインターネットなどから見つけ、論理的に分析しておかなければなら



写真 2 説得的談話の通訳トレーニング  
ASL の説得的談話を分析

ない。IT 技術の進歩は手話通訳トレーニングにも大きく貢献しており、YouTube のような動画共有サイトを通して ASL の動画を見つけることも容易になった。ASL で論理的に説得するスキルを高めるために、ASL による説得的談話を分析し矛盾点を突いていく。データ上の裏づけがないのに無理やり説得しようとしているとか、恐怖心をあおるような説得であるとか、感情的・妄信的な談話であるとか、問題を指摘するばかりで建設的な意見が見られないとか、原因と結果が整合していないなど、ASL 学習者が ASL ネイティブの談話を分析するのだ。ASL 習得度がかなり高くなければなしえないことである。

また、対照分析により、英語構文と ASL 構文の違いに気づき、ASL における論理展開の多様な手法を学ぶことになる。分析対象はろう者の談話だけではない。学生は自らの発表を撮影し、自分の説得的談話を自己分析する宿題も課せられる。

準備とプレゼンテーションのどちらを大変だと思うかは学生によって違う。分析するにふさわしい動画を見つけることが大変だという学生もいれば、授業で発表するほうが大変だという学生もいる。また、ASL の分析が的を射ているのかどうか、常に迷うと言う。論

理展開が妥当ではないと思っても、それは文化的差異によるものかもしれないなど、異言語を分析するのはかなり大変な作業のようだ。

いずれにしても、デフ・コミュニティに参加するためには、ASL で論理展開する技術が不可欠だと学生自身も理解している。説得的談話の通訳をするためには、話の展開を論理的に過不足なく予測する力が必要である。それもやはりトレーニングによって獲得できるスキルであろう。日本の手話通訳者養成校の学生をみると、日本手話はもとより、第一言語である日本語を分析し論ずるだけの力を持ち合わせていない。日本の教育自体を考えなければならぬのではないだろうか。

### 3) 通訳実習研究 (Interpreting Research Practicum)

通訳実習研究は、全 4 年生合同の授業で、通訳実習後にディスカッションを行うものである。4 年次カリキュラムには大学の授業と並行して通訳実習がある。週に 2~3 回、メンター（学生の指導や相談を担当する先輩通訳者）と共に通訳現場に向かう。前期は観察が主となるが、後期は学生も通訳を行うようになる。実習場面は多岐に渡り、この日は、小児科、大学の講演会、自分が卒業した大学のテクノロジーの講義、バレエクラスなどが報告されていた。実習後は、各自、ログシート（報告書）に記入し、メンターからも意見を記入してもらう。その後、当授業でディスカッションをする。例えば、「バレエクラスの通訳はフランス語が多用され大変だった。また、教員が稽古場を歩き回るが、どこで通訳すべきだったのか」「小児科の通訳では、患者の両親であるろう者に対して、医療スタッフが差別的なことを口にしていた。メンターである通訳者はそれを通訳しなかったが、どうすべきだったのか」「大学の講義通訳で、教員が通訳者に向かって話しかけた時はどうしたらよいか」など、実習先で直面した問題や疑問を持ち寄って、教員を交えて話し合う。通訳位置の確保の方法や、通訳ユーザーへの利用者教育、通訳倫理などについて活発な意見が飛び交っていた。

通訳実習研究では通訳のあり方や通訳論を考えるだけではない。履歴書や請求書の書き方も具体的に学んでいた。日本では、通訳者自身が請求書を作成することはないと思うが、アメリカの通訳者はフリーランスが多いので、請求書作成も通訳者の仕事となる。直前のキャンセルや時間変更などの対応方法まで勉強していた。契約段階でキャンセルポリシーを明記しておくことと指導されており、アメリカは契約主義の国だと改めて感じた。また、将来就職したいところを分野別に 3 か所選んで、各分野にふさわしい履歴書（業績・志望理由・資格等）を書く宿題が出された。日本の履歴書とはかなり違う内容だ。自分を PR する技術も不可欠だという。アメリカならではの授業だった。

#### 4) パフォーマンス通訳 (Performance Interpreting)

当授業は通訳学科限定のものではなく、ASL を学ぶ全学生が選択できる授業である。表現力を高めるため、演説 (パブリックスピーチ)・劇・ミュージカル・歌などを ASL で表現するトレーニングを行う。この日は、アメリカの著名な詩人 Robert Lee Frost の『Stopping by Woods on A Snowy Evening (雪の降った夜、森の中で)』が題材であった。英語で書かれた詩の意味を理解し ASL ポエムにする。少人数のグループに分かれた学生が話し合いながら ASL の詩を作り上げていく。途中で 2 名の教員が適宜アドバイスしたり、例を見せたりする。教員の表現は本当にうまい。学生たちは 90 分を使って、お互いに意見を出し合い、詩らしい ASL 表現を作り上げていく。彼らは、ASL と SEE (Signed English<sup>①</sup>/Signed Exact English<sup>②</sup>) の違いをよく理解している。だからこそ ASL で詩を表現できるのだ。



写真3 パフォーマンス通訳の授業の様子

今回改めてパフォーマンストレーニングの重要性を認識した。これまで、パフォーマンスは一部の通訳に限定されるもので、一般的ではないと考えていた。しかし、例えばポエムなどで求められるゆっくりと美しい手の動きは、手話の音韻が正しく習得されていなければ表出できない。芸術的な表現力を磨くことは、通常の通訳トレーニングにも大きく役立つことに気づいた。

## 2. ノースイースタン大学の学生たち

今回、手話通訳学科 4 年生の Lauren Parlapiano さんが、ボストン滞在中視察団のサポートをしてくれた。彼女は以前、日本の大学に留学していたことがあり、片言の日本語と日本の手話を話すことができる。そのため、日本からの視察団接待という特別任務を与えられたのだろう。Lauren さんをはじめ、授業の前後や特別に設けられた質疑応答の席で、学生の生の声を聴くことができた。



写真4 ノースイースタン大学 キャンパス

### 1) 学生と向学心

ボストンは学都である。かのハーバード大学をはじめ、ノーベル賞受賞者を多く輩出し

ているマサチューセッツ工科大学など有名な大学が集まっている。ノースイースタン大学も伝統ある私立大学で入学審査はかなり厳しい。毎年受験者35,000人中、合格者は2,800人。手話通訳学科も受験者40人中合格者20人だが、授業料が高額であるため最終的な入学者は6人（2009年度）だという。手話通訳学科の学生たちは学力と資力を持ち合わせているということだ。もちろん、それだけの投資をしているので学習意欲が高いことは言うまでもない。

新入生の平均年齢は18歳～19歳であるが、中には50代の学生もいる。年齢が高い学生は編入生に多い。RID（全米手話通訳者登録協会）認定資格を持ちながら、学士取得のために編入してくる者もいる。すでに他大学等でASLを学んだ編入希望者には、ASL評価テストが行われる。その結果によっては、改めてASLクラスの履修を課せられる。過去13年間の編入希望者でASLクラス履修なしで3年次に編入できた者は2人しかいない。

ASL評価テストでは、音韻・語彙・文法・用法など細かい項目別の評価基準がある。それによって習得できているところ、未熟なところがわかり、再履修等の助言もしやすい。残念ながら日本ではまだ日本手話の評価基準が確立していない。一日も早く整備しなければならぬところだ。

また、学生たちはASLだけでなく、英語の勉強にも多くの時間を費やしている。第一言語の力なくして第二言語の通訳はできないからだ。勉強すべきことはたくさんあり、学生生活はかなり忙しい。それでも、学生はその授業が何のために必要なのかよく理解して前向きに取り組んでいる。

## 2) 学生と異文化

ノースイースタン大学では、1・2年次からデフ・コミュニティに参加することを勧められる。デフ・コミュニティとの接触なくして手話通訳者になれるわけがないというのが大学の基本的な考えだ。ボストンには200年もの歴史をもつデフ・コミュニティがあり、学生のボランティア活動や通訳実習を受け入れている。学生たちにとってはすばらしい環境だ。1・2年生は授業で「ろう者学（Deaf Studies）」を学び、学外では積極的にろう者と接触しASLで会話してみる。中間年ではCo-opという現場体験（デフ・コミュニティ修行）に取り組み、3年次では義務である30時間以上のボランティア活動をする。4年生になる頃には、ろう者との人間関係が作られているという。

学生たちにとって異文化はボストンのデフ・コミュニティばかりではない。学生たちはおしなべて視察団が使っている日本手話に興味津々だった。休憩時間や食事会場が突如ミニ日本手話教室になると、瞬く間に日本手話を覚えた。言語学習能力が高く、異文化に飛び込んで多くのことを獲得しようとする姿勢が身についているようだ。覚えが良いだけでなく、自分の経験や考えを述べるスキルや、相手から回答を引き出すスキルなど、コミュニケーションの力が高い。そして何よりASLとろう者を尊敬している。

### 3) 学生と Rubrics (ルブリック)

学生たちは、常に Rubrics (64 頁参照) という評価シートで自分の到達度をチェックしながら勉学に取り組んでいる。学生たちの目標は、RID 認定資格を取得し通訳の仕事に就くことだ。RID 認定試験は甘くない。そこで、彼らは、RID の評価基準に基づいて大学が作成した Rubrics のお世話になる。Rubrics は ASL など言語力、通訳技術などいくつかの項目別に具体的な到達度を確認するためのもので、学生のみならず、プロの通訳者も使用する。日本で成績評価をするのは教員の役目だが、ノースイースタン大学では、教員も学生も同じ Rubrics を使って到達度をチェックする。もし ASL が目標レベルに達していなければ、必要なクラスの再履修を指示されるし、到達具合によっては、他学科への進路変更も余儀なくされる。「先生たちは Rubrics が大好きだけど、私たちは先生ほどじゃない」と言いながら、学生たちは冷静に自己評価し着実に階段を上っている。



写真 5 がんばれ！未来の通訳者たち  
左から 2 番目が Lauren さん

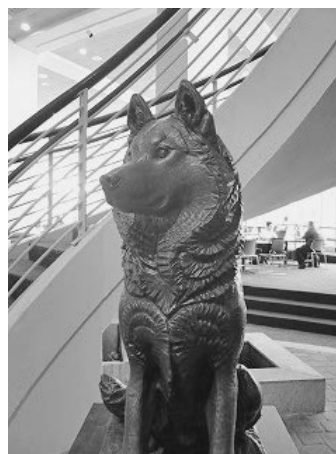


写真 6 大学マスコットの  
ハスキー犬も応援！

---

① *Signed English - use ASL signing but in English Word Order · called Contact Sign (old word Pidgin Signed English) by Clayton Valli and Ceil Lucas*

(Signed English とは、音声英語の語順に従い ASL を表現するもの。クレイトン・バリ/シール・ルーカスのいうコンタクト・サイン。昔はピジン手話とも呼ばれていた。)

② *Signed Exact English - system of manual communication (not language)*

(Signed Exact English とは、手指を使ったコミュニケーションの手段で、言語とはみなされていない。)  
(Leslie.C.Greer による解説)



---

---

# RITにおける手話通訳者の評価について

## —手話通訳の技能評価を中心に—

---

---

筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター  
特任助手 蓮池通子  
特任研究員 石野麻衣子

### 1. はじめに

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan) では、これまで RIT (ロチェスター工科大学) および NTID (国立ろう工科大学) を度々訪問させていただき、日本の大学にはない、素晴らしい通訳サービス部門の組織体制や、質の高い手話通訳者・文字通訳者の派遣サービス、さらに通訳者の技術をさらに高めるための研修および評価方法についてお話をうかがってきた。これらの内容に関しては、PEPNet-Japan 発行の『2007年度 聴覚障害学生サポートネットワークの構築を目指して アメリカ視察「高度専門領域に対応した手話通訳者の養成」報告書』に詳しいので、是非ご一読をいただきたい。

今回の視察では、手話通訳者の評価に焦点を絞り、実際に RIT で雇用している手話通訳者のスキルアセスメント (技能評価) を行う際のポイントとなる項目についてお話をいただいた。以下はその報告である。

### 2. 手話通訳者のポジション

RIT では手話通訳者に 4 段階のポジションを設定している (表1)。このポジションは上から、Senior Interpreter (上級通訳者)、Interpreter (通訳者)、Associate Interpreter (準通訳者)、Apprentice Interpreter (見習い通訳者) となっている。上2つの通訳者はより高度な通訳技術を有

表1 通訳者のポジション

技術	通訳者のポジション
高	Senior Interpreter (上級通訳者)
	Interpreter (通訳者)
	Associate Interpreter (準通訳者)
低	Apprentice Interpreter (見習い通訳者)

する通訳者であり、ポジションによって支払われる給与も異なる。目安としては、1年間の給与が Apprentice Interpreter で 3万 2,000 ドル、Senior Interpreter で 7万 5,000 ドルである。現在は、これだけの給与を支払っても、より給与の高い VRS (ビデオリレー通訳) に人材を取られてしまうことがあるということであった。

この 4 段階のポジション分けは、スキルアセスメント (技能評価) によって行われる。試験は、ASL の読み取り・聞き取り、英語対応手話の読み取り・聞き取りの計 4 パートに

分かれており、上のポジションに挑戦するためには、より難度の高い試験をクリアする必要がある。

スキルアセスメントは、手話通訳者を雇用するとき、および昇進させるかどうかを決定するときに実施される。手話通訳者を初めて雇用する際にスキルアセスメントを行うと、多くの人が下2つのポジションのどちらかに入るということであった。昇進時のスキルアセスメントでは、どのポジションから上がるときも同じ技能評価テスト基準を使用するが、上のポジションに行けば行くほど評価はシビアになる。

### 3. Skill Assessment Criteria (技能評価テスト基準)

RITの通訳部門にいる4人のマネージャーが1か月間かけて議論を戦わせ、作成されたのが、このSkill Assessment Criteria (技能評価テスト基準)である。Process Management (通訳プロセスの調整)、Message Accuracy (メッセージの正確性)、Target Language (目標言語)の3つのカテゴリーで構成されており、各カテゴリーにはそれぞれ4つから5つの下位項目がある。各下位項目は0から4の5段階で評価される。以下はその詳細である。



写真1 視察時の懇談の様子

#### 1) Process Management (通訳プロセスの調整)

##### (1) Analysis (理解)

通訳者の分析力の深さを見る。

##### (2) Monitor (自己モニタリング [通訳者の内的状況])

通訳者の内側の状態を見る。通訳者の心の中が表に現れてしまっていないか、あからさまな修正などをしたか、タイムラグや情報の固まりをどのように捉えているかなどを見る。

##### (3) Prediction (予測)

話者がこれから話すことを正確の予想できたか、付加・エラー・情報のゆがみがないかを見る。

##### (4) Linked proposition (話者の主張・意見・考えなどの関連づけ)

話の概念を一つの自然な流れとして通訳できるかどうかを見る。例えば、通訳現場で教授の話聞き、全て通して聞いて初めて話の真意に気付くことがある。その場合、教授は同じ言葉を一貫して使用しているにも関わらず、わからないまま通訳した当初の手話と、真意を理解した以降の手話が異なってしまう、結果、ろう者は流れがつかみにくくなる。通訳者は、このようなことが起こらないよう通訳すべきであるが、こ

れはレベルの高い技術であると言える。

## 2) Message Accuracy (メッセージの正確性)

### (1) Omissions and Deletions (省略と脱落)

不適切な省略や脱落を見る。聞こえているが通訳しない、もしくは、聞こえているが技術が伴わないために通訳できない場合に、技術がないと見なされる。技術がある通訳者はきちんとついていくことができる。

### (2) Skew (歪曲)

話の細かいところまで整合性がとれた通訳をしているかを見る。例えば、冬に旅に出るという話を通訳するとき、通訳者がスノーモービルで旅に出ることを想定してしまると、実際はオートバイであった場合には、情景が雪上と路上で異なってしまふ。空間の代名詞化でも指さしがきちんと使用できる技術も含まれる。

### (3) Register (言語形態)

その場に合った格調の通訳ができるかどうかを見る。例えば、友人同士の会話と学長の訓辞など、その場に合った専門用語を使えるだけでなく、異なる格調で通訳し分ける必要がある。

### (4) Affect (感情・情緒)

声の調子、表情、内面の感情（ムード）をどのように出すかを見る。この項目では、文化的な違いを伝えることも含まれる。例えば、教授が非常に落ち着いた穏やかな声で学生たちに「いい加減にしないで」と言ったとする。これを ASL で同じニュアンスで同じ効果が出るように通訳をする必要があり、その技術が要求される。



写真2 熱心に耳を傾ける参加者

### (5) Discourse (談話)

行われている対話が、通訳を通して意味のあるものとなっているかを見る。教室の中で話されている内容が元々すべて関連づけられている場合には、通訳者の通訳で不自然な間や区切れが入らないようにしなければならない。

## 3) Target Language (目標言語)

### (1) Production & Pronunciation (訳出と発音)

CL の選択の仕方や表情の文法、手話に合った口形など、目標言語が明瞭でなければならない。

### (2) Semantics and Vocabulary (意味論および語彙)

正しい意味の手話語彙が選択されているかどうかを見る。

(3) Grammatically (文法)

ASL のネイティブが見たり、英語のネイティブが聞いてたりしても、納得のできる通訳をしているかどうかを見る。

(4) Presence (プレゼンス [通訳者としての存在感、雰囲気])

技術の伴わない通訳者は、話者の発話に引っかかってしまい、「伝える」部分に影響が出てしまう。この様なことがないように通訳者として存在しているかどうかを見る。

#### 4. まとめ

RIT 独自の評価テスト基準は、通訳プロセスの調整、メッセージの正確性、目標言語という大きな枠組みの中に各項目が位置づけられており、その通訳が評点0から4のどれにあてはまるのかの基準も具体的に記されていた。さらに評価の際は、この内容を十分に理解する熟達した者が担当し、通訳者は評価を受けてレベルを上げていく。このようなステップアップの仕組みは日本には存在せず、大変興味深い。

ただし、これらの項目をそのまま日本の手話通訳者養成に当てはめることは難しいのではないと思われる。この技能評価基準は、あくまでも RIT の手話通訳者のポジションを決定するために用いられているものであり、評価の内容に精通した者が運用している。日本での高等教育などの場面に対応する手話通訳者には、これらを参考として、日本の現状に即した新たな技能評価基準が作成されることが望ましいと考えられる。

これまで度々RIT および NTID を訪れ、その手話通訳サービスの歴史や変遷を学んできた。そして、長い時間をかけてこれらの技能評価基準ができあがって来ていること、さらにそれらを作り上げるためのたゆまぬ努力に改めて敬意を表すと共に、これらを参考として、日本においても議論や検討が重ねられ、明文化された手話通訳の技能評価基準が作成されることを期待したい。

---

---

## 遠隔教育による手話通訳者養成

### ー北コロラド大学 DOIT センターの取り組みー

---

---

筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター  
特任研究員 石野麻衣子

#### 1. はじめに

アメリカでは、主に高等教育機関で手話通訳者を養成しており、そのうちの約 25%が 4 年制大学で実施されている。今回訪問した北コロラド大学 DOIT センターでは、学士号 (Bachelor of Arts degree = BA) 取得が可能な手話通訳者養成課程 (以下、学士号取得プログラム)、及び、手話通訳者の現任研修を、インターネットなどによる遠隔教育によって行っている。本稿では、学士号取得のプログラムを中心に、DOIT センターがどのように遠隔教育による手話通訳者養成を実現しているのかについて報告する。



写真1 DOIT センター ディレクター  
Leilani J. Johnson 氏

#### 2. DOIT センター概要

“DOIT” とは、Distance Opportunity for Interpreter Training を省略した名称である。1993 年設立の同センターは、質の高い教育で質の高い通訳者を育て、ろう者に社会への対等な参加の機会を提供することをミッションとしている。そのため、都心部と比較して通訳教育を受ける機会の少ない地方の通訳者にもその機会を提供するため、オンラインによる遠隔手話通訳者養成を行っている。

DOIT センターで現在提供しているプログラムには、以下の 4 つがある。

##### 1) BA in ASL-English interpretation (学士号取得プログラム)

学士号取得可能なプログラムである。入学条件は、会話をするのに十分とされる ASL 1～4 をクリアしていること、ろうの専門家が作成した入学試験を受け、合格することである。受験者のうち 35%は基準に満たず不合格になるなど、厳しいテストになっている。このような条件を設定するのは、オンラインで手話そのものを教えることは不可能であると考えているからである。そのため、すでに手話を学び、コミュニティとのつながりのある通訳者を対象者とするところになっている。また、卒業後の全米手話通訳者協会認定試験に合格するには、一から学んでいたのでは時間が足りないため、ある程度の技術を持った学

習者を対象にプログラムを提供している。

普段の授業は遠隔教育で行われる。さらに、毎年夏に1ヶ月間のスクーリングを実施するが、DOIT センターとしてはこれを重要な機会としてプログラムに組み込んでいるとのことだった。授業時間は4年間で120時間であり、『Entry-to-Practice Competencies (入門から実務までの各段階において必要な能力)』各項目の評価を受け、これに合格した者が卒業となる。

学士号取得プログラムの詳細は後述する。

## 2) Educational Interpreter Certificate Program (教育通訳者認定プログラム)

初中等教育場面での通訳を想定した養成プログラムであり、DOIT センターで最も古いプログラムである。対象者は、現在小学校、中学校、高校で通訳を行っており、さらなる技術トレーニングを希望する通訳者である。週1回程度のクラスを3年間受講し、30単位を取得する。現在の受講生は20名(全て女性)で、アラスカ、アイダホ、カンザスなど、6州から参加している。

## 3) Legal Interpreting Training Program (法務通訳者養成プログラム)

法律関係の通訳を想定した養成プログラムであり、対象者の州の司法通訳資格を満たしている人が対象となる。4学期(1学期は約3ヶ月)の受講及びインターンシップが課せられており、最後にデンバーやオーロラカウンティの裁判所で、弁護士の通訳や模擬通訳を行うことにより、習得した技術の確認を行う。

## 4) Leadership & Supervision Certificate (リーダーシップ&スーパービジョン認定)

2009年1月にスタートしたばかりのプログラムである。全米手話通訳認定資格保有の通訳者が対象となり、4セメスターで後輩の通訳者を評価・指導・助言するための技術を養うことを目的としている。

## 3. BA in ASL-English interpretation (学士号取得プログラム)

DOIT センターで実施する遠隔手話通訳教育の中でも、特筆すべきは学士号取得プログラムであろう。以下にそのプログラム構築の過程と詳細について説明する。

### 1) 通訳トレーニングプログラム構築・カリキュラム開発事業

このプログラムのベースとなっているのが、通訳トレーニングプログラムのモデル構築・カリキュラム開発を目的とした事業である。これは、2000年から2005年にかけて、連邦政府の助成金を獲得して行われた。

#### (1) 背景及びプロセス

背景として、既存の手話通訳者養成課程終了時の通訳レベルと、RIDの認定(現在は全米手話通訳者協会認定資格に委嘱)を受けるための通訳レベルに、大きなギャップがあったことが挙げられる。RIDの認定試験は、通訳理論、歴史、専門知識、ろう文化を問う筆記試験、及び実技試験が課せられる。しかしかねてより、大勢を占めている2年間での養成で

は RID の認定試験合格に必要な知識・技術を習得できず、時間も足りないという問題点が指摘されていた。ろう者からは通訳の質に対する不満があがっており、それに答えなければならぬという課題もあった。一方通訳者側には、プロフェッショナルとして向上したい、より地位を高めたいという希望があった。

そこで、手話通訳者養成プログラムで何を教えるべきか、プログラム修了後 RID の認定試験に合格するために必要な技術は何かを検証し始めた。

まず、全米の手話通訳者養成プログラムを持つ教育機関に対して、教育課程の目的や、卒業時に身につけているべき能力に関する調査を行った。その結果、共通認識がほとんどなく、養成の内容には各機関でばらつきがあることが明らかになった。そこでアプローチを変更し、手話通訳者の雇用者、ろう者、手話通訳者、手話通訳者養成を担う教員、手話通訳学習中の学生など約 400 名にインタビューを行い、技術技能、人的技術、専門的な技術、一般教養などの分野において必要な能力についてのデータを収集した。

## (2) 『Entry-to-Practice Competencies』の確定

その結果、必須の技能として、『Entry-to-Practice Competencies (入門から実務までの各段階において必要な能力)』34 項目を確定した(84 頁参照)。34 項目の特徴としては①リスクのある場面ではなく、一般的な通訳を行う際に必要な技術であること②ろう者の多様性(教育歴、使用する手話が ASL か音声英語の語順に則した手話か、など)に対応できること③通訳者は常にスーパーバイザーがいるわけではないため、自分一人で判断できるようにすること④全米手話通訳認定試験に合格するための力をつけることができること、以上4つが挙げられる。確定した項目は、5 領域に分けられている。

- 理論と知識の能力

効果的な通訳を行うために必須の学問的な基盤と世界的知識に関する能力。

- 人間関係の能力

同僚、利用者、雇用者との効果的なコミュニケーションと生産的な協働体制を促進する能力。

- 言語的能力

アメリカ手話及び英語に関する能力。

- 通訳技術の能力

さまざまな場面において幅広い題材に関する ASL—英語間の通訳を効果的に行う技術的な能力。

- プロフェッショナルとしての能力

プロフェッショナルに求められる基準や実践に必要な能力。

## 2) カリキュラム

従来型の伝統的なアプローチの場合、通訳教育を受ける前の段階では、学習者の“外”に知識と経験が存在し、カリキュラムの設計者は学習者の“外”にある経験と知識で必要なものを抽出し、教育課程として構成するという前提に立っていた。よって、教員は学習

者に自らが持つ経験と知識を説明し、学習者はカリキュラム修了後に、実際の通訳現場で習得したことを実践する、という流れになっていた。

前述の必要な能力 34 項目確定以後のカリキュラムでは、通訳者に必要な能力をベースにしたアプローチになり、学習者がすでにそれぞれの生活の中で知識と経験を習得しているという前提に立っている。受講中は、それらと新しい体験をマッチさせながら、新しい価値と知識を習得できるようになっており、通訳シミュレーションと実際の通訳現場を体験することによって、さらに新しい経験と知識を習得できるようになっている。修了後は、受講中に身につけた自分自身の経験と知識を土台に、さらにそれらを積み重ね、実際の通訳現場に適応していくことができるようになった。このように、カリキュラムの構造そのものが変化したと言える。

手話通訳者養成カリキュラムは、必須項目として 34 項目が確定したのち、12 人の専門家によってカリキュラムに組み込む作業が行われ、400 ユニット（単位）が定義され、44 コース（科目）のシラバスが作成された。これらが整理され、学士号取得のための課程として、4 年間で 120 時間のカリキュラムが設定された。内訳は図 1 の通りである。

手話通訳者養成のコースは、社会言語学的な理論とデマンドコントロール理論（46 頁参照）を融合したプログラムになっている。通訳現場に行ったときに必要なのは、確かな言語力と、現場のデマンドを的確に把握しコントロールする力であるためである。

また、学生は毎年スキル評価（Portfolio Assessment）を受ける。評価者はろう者（ASL 講師）、手話通訳者、通訳者養成課程教員である。全ての講義は必要な能力 34 項目のどれかに焦点を当てているため、卒業をする頃には項目全てに合格することが期待される。毎年のスキル評価で十分な技能に達しない学生の場合は、講義を繰り返し受講したり、1 対 1 でろう者のメンターによる指導を受けたりして、技術向上を目指していく。ただし、最終的には個人の努力にかかっているとのことだった。

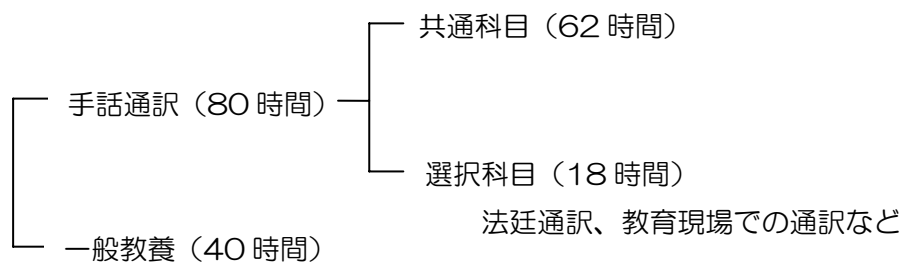


図 1 カリキュラム構成と時間数

#### 4. 遠隔教育

遠隔教育と言っても、常に教員と学生がウェブカメラに向かっているわけではなく、ウェブ上の教材を見て学習、またはウェブ上の掲示板を通して議論を行う、などの方法で進められる。DOIT センターでは、遠隔教育を行うためにいくつかのアプリケーションを使用している。



## 1) Blackboard

オンライン教育を行う際に重要になるのが、Blackboardと呼ばれるパスワード管理されたコースウェア(ある分野を体系的に習得するために、教材をデータ化した教育用アプリケーション)である。掲載内容は、各コースのスタディガイド(シラバス)、講義の配付資料、映像を含む教材、ディスカッションボード(掲示板)などである。

ディスカッションボードでは、テーマごとにスレッドを立て、学生が書き込みを行い、意見を交換する。ある程度議論したタイミングで教員がまとめとして意見を書き込み収束する。例えば、Blackboard上にアップロードされたASLの詩を見て、感じたことを話し合い、手話の分析について意見を交換する(写真2)。

SDカメラ(小型の簡易ビデオカメラ)で学生が自らの通訳映像を撮影したものをアップロードし、それを教員がチェックし、ビデオでコメントを返す、というやりとりもBlackboardが可能にしている。学生は教員のフィードバックを繰り返し見ることができるというメリットがある。

テストもオンラインで受験する。問題の手話映像を視聴し(写真3)、回答欄に書き込んで送信する(写真4)。例えば、写真4では「問題1 クリップ 20-1 教員が手話で話したことと同様の内容を英語で書きなさい。」とある。回答は教員に送信される。教員はテストの結果を成績表に反映させ、学生はBlackboard上で成績を確認することができる。

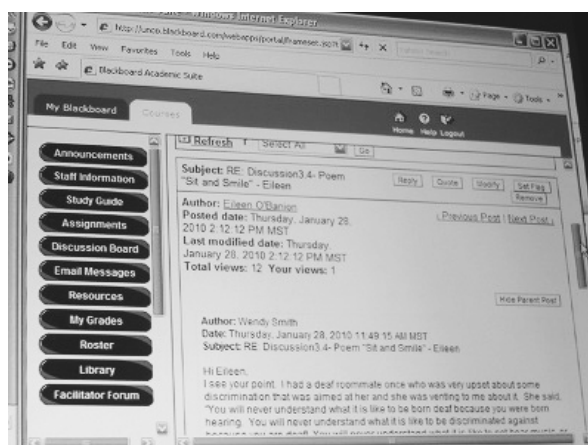


写真2 ディスカッションボード



写真3 テスト問題映像

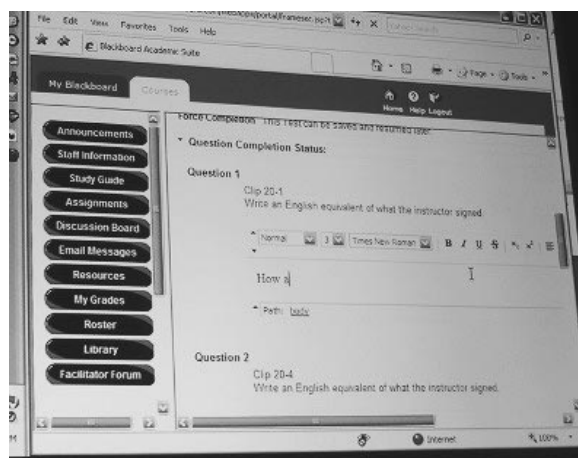


写真4 テストの回答欄

## 2) ooVoo (ウーヴー)

市販のテレビ会議用ソフトウェア。オフラインでのやりとりだけでなく、教員と学生がオンラインでディスカッションすることもある。このときに使用されるのが、ooVoo というソフトウェアであり、ウェブカメラを用いて最大6人まで同時に会話が可能である。教員がろう者の場合はビデオチャットで会話をするが、健聴者の場合は電話会議を用いることもある。



写真5 ooVoo の画面

## 3) Wimba classroom

教員がオンラインで講義をするためのソフトウェアである。学生は教員の様子を見ることができ、お互いの様子は見るできないようになっている。教員は、学生の様子をライブで見ることができる。また、チャットで質問をすることも可能である。実際に教室内のような感覚を得ることができる利点があり、手話通訳の実技指導を行う講義に向いているツールであると言える。また、録画してアーカイブとして保存することも可能である。

## 5. まとめ

本稿では、北コロラド大学 DOIT センターで行われている、遠隔教育による手話通訳者養成プログラムの取り組みについて報告した。学士号取得プログラムでは、関係者のインタビューという根拠に基づいた、『Entry-to-Practice Competencies (入門から実務までの各段階において必要な能力)』が示されることによって、手話通訳者の目指すべきものが明らかになっており、これをもとにカリキュラムが組まれていた。定説的に言われている通訳技術を伝承するのではなく、ニーズを分析・整理した上で養成を行うことは、非常に重要だと思われる。さらにこのプログラムが、遠隔教育によって提供されることにより、通訳教育の地域間格差が是正され、結果として通訳の質の地域間格差解消に貢献しており、果たすべき役割は大きいと感じた。視察前は、対人コミュニケーション職である手話通訳者を遠隔で教育することに対して懐疑的だった。しかし、入学前に一定レベルの手話を身につけていること、遠隔教育を手助けする様々なソフトを使用することで、実技の直接的または間接的な指導が受けられること、遠隔とは言えスクリーニングを重視していることがそれを可能にしており、これらのベースとして必要な能力の習得というぶれることのない学習目標があるからこそ、遠隔での通訳教育が実現しているのだと感じた。

---

---

## Front Range Community College を訪問して

### ーデジタルラボを使った手話通訳トレーニングー

---

---

筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター  
特任助手 蓮池 通子

#### 1. はじめに

今回視察にうかがった Front Range Community College (以下、FRCC) は、日本で言う2年制の短期大学である。この大学では、2年間の手話通訳者養成コースを持っており、アメリカで手話通訳者養成を行っているごく一般的な大学と言える。この大学を視察先に選んだきっかけは、北コロラド大学の Colorado Distance Opportunities for Interpreter Training Center (以下、DOIT センター) のディレクターである Leilani J. Johnson 氏のご紹介であった。この FRCC では、手話通訳トレーニング用の最新式デジタルラボを使用しており、その機能と活用方法について、下記3名の方からご説明をいただいた。以下はその報告である。



写真1 入口のサインボード

Joyce Brubaker 氏 (写真2 左)

ラボコーディネータ。デジタルラボの管理とスタッフの調整、教員や学生に対して、ラボの利用に関するサポートを行っている。ろう者。

Nowell Busch 氏 (写真2 中央)

ASL 及び手話通訳者養成コースの教員。ASL と手話通訳者養成コースのコースコーディネートを担当している。ろう者。

Lynda Rimmel 氏 (写真2 右)

ASL 及び手話通訳者養成コースの教員。Busch 氏と同じく、コースコーディネートを担当している。聴者。



写真2 Brubaker 氏、Busch 氏、Rimmel 氏

## 2. 2つのデジタルラボ

FRCCにはデジタルラボが2つある。一つは部屋にあるパソコンのOSがWindowsで統一されている「PCラボ」と、もう一つは、部屋にあるパソコンのOSがMacOSで統一されている「Macラボ」である。FRCCでは、自ら養成する手話通訳者たちの卒業後を見据えて、どちらのタイプのパソコンでも操作できるように2つのラボを整備している。

このラボが整備されるまでは、部屋にはビデオカメラとVHSのごく普通のラボがあった。このようにデジタル化が開始されたのは約5年前からで、その大きなきっかけは、補助金の獲得であった。まず先にMacラボの整備が行われ、次に、PCラボが整備され、現在のような2つのデジタルラボとなった。

以下、デジタルラボの特徴的な設備及び利用に関する説明である。

### 1) PCラボ

PCラボは、写真3・4のように教員が使用するコントロール側と、学生が使用する個人ブース側とに分かれている。コントロール側からは、学生が使用するそれぞれのブースのPCやモニタに映る映像などを制御することができる。また、用途に合わせて、全体にビデオを流したり、班ごとや個人別に学生側のブースを制御するなど、用途に合わせて様々なコントロールができる。ここで使われているシステムは、基本的に外国語の発音などを練習するために使用するLL教室（Language Laboratory 教室）と同様のものとなっている。



写真3 コントロール側



写真4 学生ブース側

ただし外国語を学ぶ際に使用されるLL教室と異なり、このラボでは学生用の個人ブースが、防音の壁で隔てられており、それぞれの壁は引き戸のように引き出すことが可能になっている。さらに両側の壁と壁の間にカーテンをつけることで簡易個室ができる（写真5・6）。これは、手話通訳や手話の練習をする際に、隣の人の動きが気にならないようにするためと、学生一人ひとりのプライバシーを守るために作られたもので、写真6のように他人の目を気にすることなく手話通訳の撮影や練習ができるようになっている。



写真5 学生側ブース  
引き戸を出した状態

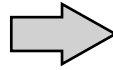


写真6 学生側ブース  
カーテンを閉めた状態（簡易個室）

このラボで使われているシステムは、SUNS（sony sounds software company）が開発した、音声言語訓練用のシステムで、それを手話通訳者養成にも利用できるような特別にカスタマイズしてもらったとのことだった。



写真7 教員側のコントロール画面

教員が操作を行うコントロール側は、写真7の様な画面になっており、左側の部分で学生側ブースの設定状況がわかるようになっている。右側は、様々な操作用のボタンが表示

されている。この画面からは、学生の個人ブースのカメラやパソコンを制御することができる。音声を流す場合にも、教員が英語の音声会話などを送りたい場合には、それぞれのブースにあるヘッドセットに流れるようにしたり、教室内に設置されたスピーカーから教室全体に音声を流すことが可能である。

写真7の左側部分は、学生個人ブースの状態を示しており、グループごとに色分けされ表示されている。写真7では、各ブースが4種類に色分けされているが、これは学生が4つのグループに分けられて、グループごとに制御できることを意味している。このようなグループ分けはマウスのクリックで各ブースを選択するだけで変更可能で、それぞれのグループに対して、教員から異なる課題を与えたり、指示を出したりすることができるようになってきている。また、グループではなく、個人に対して課題を出したり、指示を出すこともできる。反対に、教員からの指示や課題ではなく、学生が個人的な課題に取り組みたい場合には、学生側で、教員からの指示や課題の連絡が来ないように通信をシャットアウトすることもできる。ただし、これは必要に応じて教員側から解除できるようになっている。

このシステムを利用して、学生らは聞き取り通訳や読み取り通訳、シャドーイングなどの練習に取り組む。そして課題が出された場合には、個人ブースにあるビデオカメラやマイクなどを使い、通訳している様子などを録画・録音することができる。録画・録音されたものは、大学のサーバー内にある個人フォルダに保存することができるようになっている。さらに教員に提出が必要な課題については、サーバーに「ドロップボックス」というディレクトリが作られており、ここに保存することで提出が完了する。ただし、一度この「ドロップボックス」にファイルを保存してしまうと、学生側からはアクセスできなくなるような設定になっている。

以下の写真8と9は、実際に学生たちが提出した課題ファイルである。提出されたファイルは、聞き取り通訳・読み取り通訳などそれぞれの目的に合わせて、教員がチェックを行う際に、作業がしやすい様な形で保存されている。

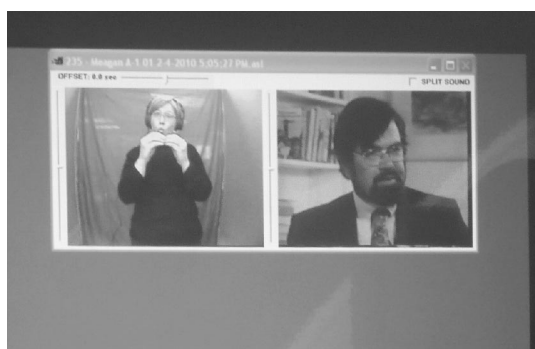


写真8 聞き取り課題

＜聞き取り通訳課題の場合＞

左側は、通訳をしている学生の様子を撮影したもの。右側は、話者の映像が流れている。

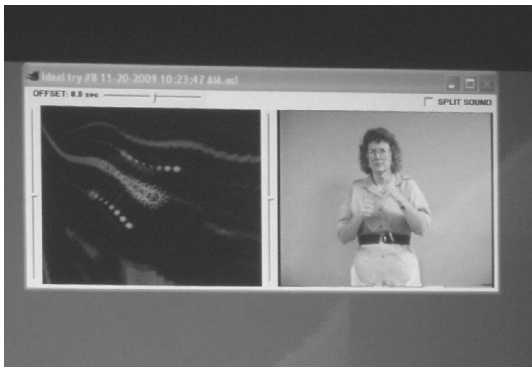


写真 9 読み取り課題

＜読み取り通訳課題の場合＞

左側は、通訳者の読み取った通訳音声の流れている。右側は、ろう者が語っている映像が流れている。

このように、どちらも元の話者の映像と共に通訳映像や通訳音声も収録されており、通訳者のつまずきや通訳が話者の雰囲気と合っているのかなどが確認しやすくなっている。

また、教員側では提出された課題に対してチェックを行い、評価コメントをつけて返却をするという作業が必要となるが、このシステムでは、映像・文章・音声などの複数の形式で評価コメントを挿入することが可能となっている。

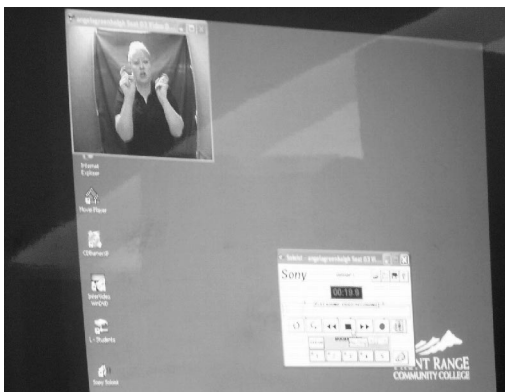


写真 10 学生が提出した映像

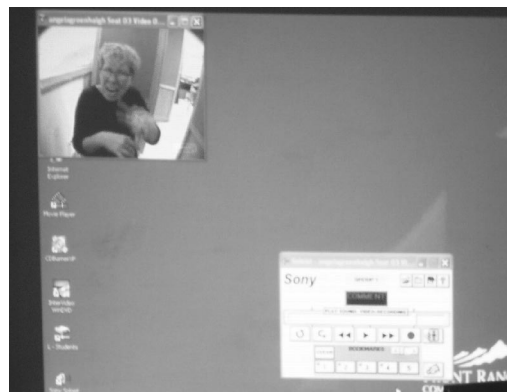


写真 11 ろう教員が評価コメントをしている映像

これは一例であるが、写真 10 は学生が自らの経験談を手話で語り、録画したもので、これについてろうの教員に手話のチェックを依頼した映像である。写真 11 は、ろうの教員が評価のコメントを手話で語っている映像である。

教員から返却されてきた課題にコメントがある場合には、画面右下の小さなウィンドウのタイムゲージの下の部分に「ブックマーク (Bookmark)」が表示される (写真 12 に拡大図)。これは学生の手話での語りの映像を見て、教員がコメントを入れたことを示すマークで、教員側は気になるところで自由に映像を止め、その部分到手話や文字などで自分の評価コメントを入れることができる。

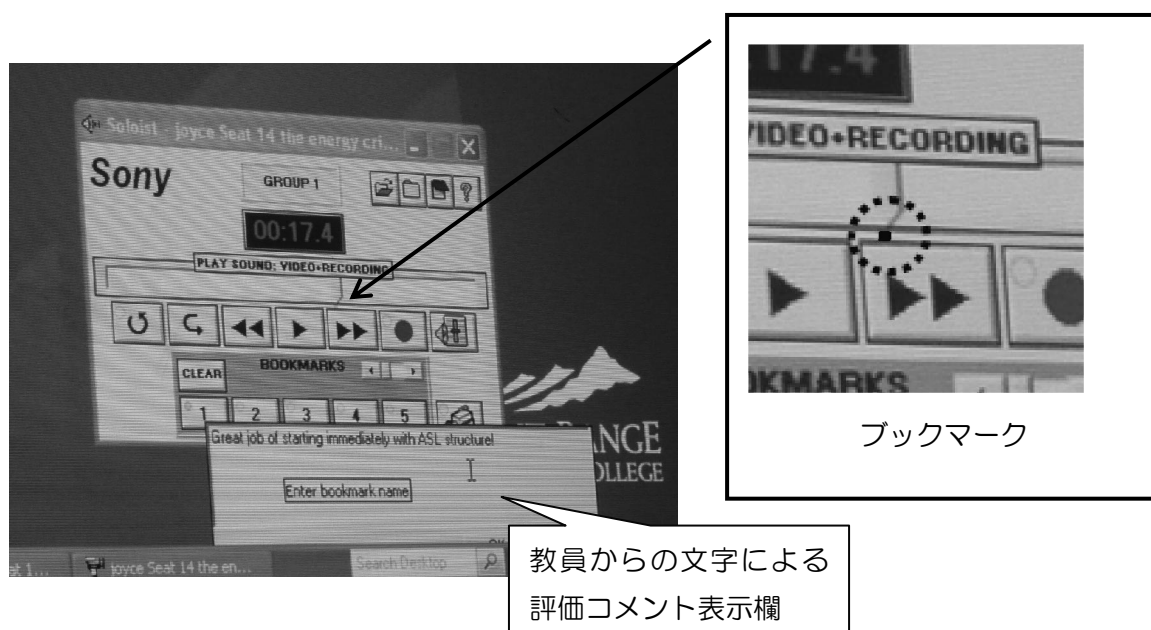


写真12 ブックマーク (Bookmark)

教員のチェックが終わり、学生が返却されてきたものを再生すると、ブックマークのある箇所で、教員のコメント映像やテキストによるコメントが自動的に再生または表示されるようになっている。

このシステムは、ろうの教員と聴者の教員が同等に教育に関わりを持つために重要である。すなわち FRCC ではろうの教員が単に ASL という言語を教えるだけの役割ではなく、もっと重要な立場にあると考えるからこそ、こうしたろう教員からのフィードバックを自由にもらうことのできるシステムを導入しているのである。また、学生たちが手話通訳を学ぶ場合にも、聴者から学ぶのではなく、顧客（通訳を利用する側）としてのろう者から学ぶことが大切であると考えている。この様な意味においても、手話通訳者養成プログラムを担当しているろう教員にも、このシステムは好評であるとのことであった。

## 2) Mac ラボ

Mac ラボは、MacOS の入ったパソコンが置かれている部屋である。基本的には、PC ラボと同じ機能を持っている部屋で、教員が使用するコントロール側と学生側ブースとに分けられている。ただし、Mac ラボの学生個人ブースには仕切りはなく、写真 13・14 のように開放的な作りになっている。



写真 13 Mac ラボ



ここでは、インスタントメッセージソフトを使って、文字で送られてきた内容をろう者に手話通訳をして伝えたり、ビデオチャットなどを使ってリレー通訳の練習をすることもある。また Mac ラボには、ろう者の家庭に普及してきている、ビデオフォンシステム（テレビ電話）が設置されており、実際にこのシステムを使うこともあるということであった。



写真 14 Mac ラボ個人ブース

### 3. 教材

これらのラボで使用される教材は、すべてデジタル化されて、学内サーバーに保存されている。教材は、ろう者が手話で語っているビデオや聴者が話しているビデオなど様々なものが用意されており、約2,000本が所蔵されているということであった。しかしながら、学生らはそれらの教材のすべてにアクセスできるわけではなく、学生が自由に閲覧可能なもの、教員のみアクセスが許可されているもの、学生の学年やコースによってアクセスが制限されているものなどの分類がなされている。さらに、著作権の問題などでデジタル化できずにDVDやビデオテープのままで保管されている教材もあるとのことであった。

また、地元であるデンバー市内や近隣地域のろう者に協力を依頼して、ろう者が手話で語っている映像を撮影するなどして、教材を増やしているとのことであった。これは、学生が卒業後に手話通訳者として活躍することが予想される地域のろう者の手話に慣れるようにという意味も含まれている。

### 4. 地元のろうコミュニティとの連携

FRCC では、地元のろうコミュニティの代表者と教員がメンバーとなって組織されている、諮問委員会（アドバイザリーボード）を設置している。ここでは、FRCC での手話通訳教育がどうあるべきかについての諮問を行っている。FRCC から輩出した手話通訳者たちが、顧客であるろう者を満足させることが出来ない場合には、即刻教育カリキュラムの見直しが必要となる。そのためにも、ろうコミュニティからのサポートとフィードバックに常に耳を傾け、FRCC で提供している教育カリキュラムに問題がないか確認を行っている。



写真 15 FRCC 入口

また、教育カリキュラムに対しての意見をもらう一方で、地元のろう者には、身近なる

う者の手話表現の勉強のために、サンプルビデオの撮影をさせてもらったり、実際に学校へ来てもらうこともある。例えば、チューターとして指導をお願いしたり、ろう文化のクラスでは、ゲストスピーカーとしてプレゼンテーションを行ってもらうなど、非常に多くの協力を受けている。このような地元ろう者コミュニティとの連携は必要不可欠で、学校や手話通訳者養成コースの存在意義に関わるものであるとのことであった。

## 5. おわりに

このようなデジタルラボを備えた手話通訳者養成コースでは、コンピュータを使いこなせる力も必要になってくる。入学当初は全くコンピュータが使えない学生でも、使い方を指導すれば、問題なく使いこなせるようになっていく。FRCC では、卒業後のことも考えて2種類のラボを準備しているが、卒業後にコンピュータを使いこなせないから仕事に影響があるかといえば、さほど大きな影響があるわけではない。しかしながら、現在の手話通訳派遣エージェントでは、実際にここで使われているようなデジタルテクノロジーを使ってビデオリレーによる手話通訳サービス（VRS）を行っているところもある。事実、手話通訳派遣エージェントからは、VRS システムを使った手話通訳を教育プログラムの中に組み入れて欲しいといった要望も出ているということであった。

また FRCC では、現在2年制のコースとして手話通訳者を養成しているが、教員たちは4年制のコースになることを希望している。すぐには難しいことであるが、Leilani 氏の DOIT センターで行われているオンラインでの遠隔手話通訳者養成コースとパートナーシップを組み、FRCC での対面教育と DOIT センターでの遠隔教育をうまく組み合わせたいと考えているということであった。このようなラボを備え、多数のろう者の教員を配置しているコミュニティカレッジさえ、2年では手話通訳者養成には時間が足りないと感じているということである。日本における手話通訳者養成のほとんどが、市町村などの単位の市民講座で1～2年間、1週間に2時間程度の講座であるということとのギャップを感じざるを得ない。

---

---

# Purple Language Services

—Denver Communication Center にて—

---

---

群馬大学学生支援課 障害学生支援室  
専門支援者 中永 亜貴子

## 1. はじめに

Purple Language Services（以下、Purple 社）は、デンバーにある手話通訳派遣サービスを行う会社で、全米各地に支店があり、今回の訪問先のようなコミュニケーションセンターが21箇所、16州に点在している。1つの州に対して、複数のセンターが設立されている州もある。Purple 社では、このサービスを行うにあたり、「いつでも、どこでも、人々間のコミュニケーションがスムーズに行われるようサービスを提供する」を企業理念として掲げている。

その上で、サービスユーザーであるろう者・難聴者のための3つの大切な心得として、ろう者・難聴者をよく知ること、質の高いプロフェッショナルな通訳サービスを提供すること、みんなが熱意と使命感を持って仕事にあたることを定めている。

本稿では、Denver Communication Center マネージャーである Dannel Johnson 氏からうかがったサービス内容と、Purple 社が制作したソフトについて報告し、あわせてセンター内の様子についても紹介する。



写真1 Purple 社のマーク



写真2 VRS 使用時の画面構成

## 2. 提供されているサービスの概要

同センターでは、主に VRS（ビデオリレーサービス）とコミュニティ通訳を行っている。

VRS は、電話をろう者も利用できるように政府が国として保障しているサービスで、これまでは TTY<sup>①</sup>がその役割を担ってきたが、現在は VRS の利用へと変わってきている。VRS サービスの提供には、エージェンシー（民間企業）が政府に申請し許可を得

る必要がある。サービスを利用する時は、ろう者がテレビ電話を使用してオペレーターに連絡し、そのオペレーターが聴者に電話をする流れになっている。

またコミュニティ通訳は、病院や裁判所、政府、教育現場などの各種公共サービスや、企業、会議、イベントなどの社会生活を送る上で必要な場面に派遣されて行う通訳のことを指す。最大車で片道 6 時間かかる場所にも派遣されることもあるが、依頼の大半は都市部に集中している。

このように、VRS とコミュニティ通訳を提供しているセンターは大変珍しく、同センターの特徴的な面といえる。一般的なセンターでは、コミュニティ通訳のみを行っているため、通訳者は依頼が来るのを待つしかない。そのため、フルタイムで雇用され、常にセンターに待機する「スタッフ通訳者」は、依頼が無ければ何時間も待っているだけになってしまい、会社側から見るとコストがかかってしまうことになる。一方、フリーランスの通訳者の場合は、依頼がないと稼ぐことができない。同センターでは、スタッフ通訳者の場合はシフトを決めて VRS 通訳を担当し、緊急の依頼が入ればコミュニティ通訳に行き、休憩を挟んで、また VRS 通訳に戻ることができる。また、VRS の場合全米のろう者を相手に通訳をする必要があるので、通訳者にとって最も難易度の高い通訳になる。そのため、会社としては最も質の高い通訳者を VRS に当てたいが、VRS に通訳者を専従させてしまうとコミュニティ通訳で質の高い通訳が得られなくなってしまう。そのような状態を回避するためにこのシステムが考えられた。スタッフ通訳者がコミュニティ通訳と VRS を兼ねることで、ろう者はコミュニティ通訳を依頼する時いつでも好きな通訳者をリクエスト可能になる。このように、VRS、コミュニティ通訳ともに質の高い通訳を得られる状況を実現することができ、ろうコミュニティにとっても非常に便利なシステムであると言える。

さらに、スタッフ通訳者が何人も控えているため、緊急時でもすぐ通訳に入ることが可能である。コミュニティ通訳と兼任することで、難易度の高い VRS をやり続けなくて済み、また、他の通訳者と一緒に仕事をする中で相互に研鑽を積むことができるため、通訳者にとっても安心して仕事を担える環境になっている。

上記の取り組みの結果、これまでの通訳充足率（通訳依頼件数に対する通訳派遣件数の割合）はほぼ 100%に近い。

VRS、コミュニティ通訳以外の事業としては、国外への通訳サービスの提供や、VRI（ビデオリモート通訳）、文字リレーサービス、CART<sup>®</sup>による文字通訳を行っている。

### 3. 登録通訳者

Denver Communication Center には、フルタイムで雇用されているスタッフ通訳者 25 名、正規雇用ではないフリーランス通訳者 75 名が在籍している。スタッフ通訳者は全員、フリーランス通訳者もほぼ全員が全米手話通訳認定資格を有している。その他にセンターの運営スタッフもいる。彼らも RID 認定資格を持っており、このスタッフが手話通訳の現場に出ることもある。

#### 4. コミュニティ通訳における通訳者派遣の流れ

まず、ろう者や民間企業から、メールやFAX、ビデオフォン（テレビ電話）で通訳依頼を受ける。初めての依頼の場合には、通訳料やルールについて説明した後で契約する。次に、通訳に必要な内容や対象者、その通訳現場の様子など情報の収集をし、それに見合った通訳者を確保する。どこの派遣会社も同じだが、通訳者の確保が一番の難題である。通訳者が決まると、依頼者に誰が派遣されるのかを連絡する。また通訳者派遣後には、請求書の送付や依頼者側に対して満足度調査を行い、改善に努めている。満足度調査はほぼ満足という回答が得られているが、不満足という回答については、コスト面や請求書送付の遅滞、通訳者の遅刻などが挙げられている。また、アメリカにはADA法（障害を持つアメリカ人法）<sup>③</sup>があるため、基本的には企業や主催者側が謝金を支払わなければならないことは理解されているが、まれに誰が払うのかでもめることがある。

#### 5. Purple社製ソフトウェアの紹介

同社で使用されているVRS用のソフトウェアが「P3（ピースリー）」である。写真3の通り、右側の小さな画面が自分側の映像で、左の大きな画面が通訳者側の映像である。右下にはテキストチャットボックスがあり、通訳者が電話をかけた際に、ろう者側の番号が自動で表示されるようになっている。



写真3 P3画面構成（聴覚障害者が見る画面）

ろう者は、テレビ・D-Link（テレビ電話）のセット、パソコン・ウェブカメラ・P3ソフトウェアのセット、MVP（携帯型ビデオフォン）、オールインワンのPurple社オリジナルネットワークのいずれかを準備する必要がある。機械操作となると、年配の方には不向きと思われるかもしれないが、専門の技術者がおり、セットアップはもちろんのこと、使い方まで指導してくれる。その結果、年配のろう者からもコミュニケーションが取れると大満足の声があがり、使いやすさも評判の一つとなっている。

#### 6. センター内見学

視察の後半で、質疑応答およびセンター内の見学をさせていただいた。内部は撮影不可のため、配置図にて紹介する（図1）。

特徴的なのは、スタッフに女性が多く、現在の運営スタッフに妊婦がいることもあり、

センター内に授乳室が設置されていることや、通訳ブースのほか、カウンセリングを行ったりマッサージを受けられたりするヒーリングルームがあることである。通訳者のカウンセリングは、センターのマネージャーが兼任している。壁などにはろうのアーティストたちが作った作品が展示・販売されており、時折その作品を買っていくお客さんもいるそうだ。

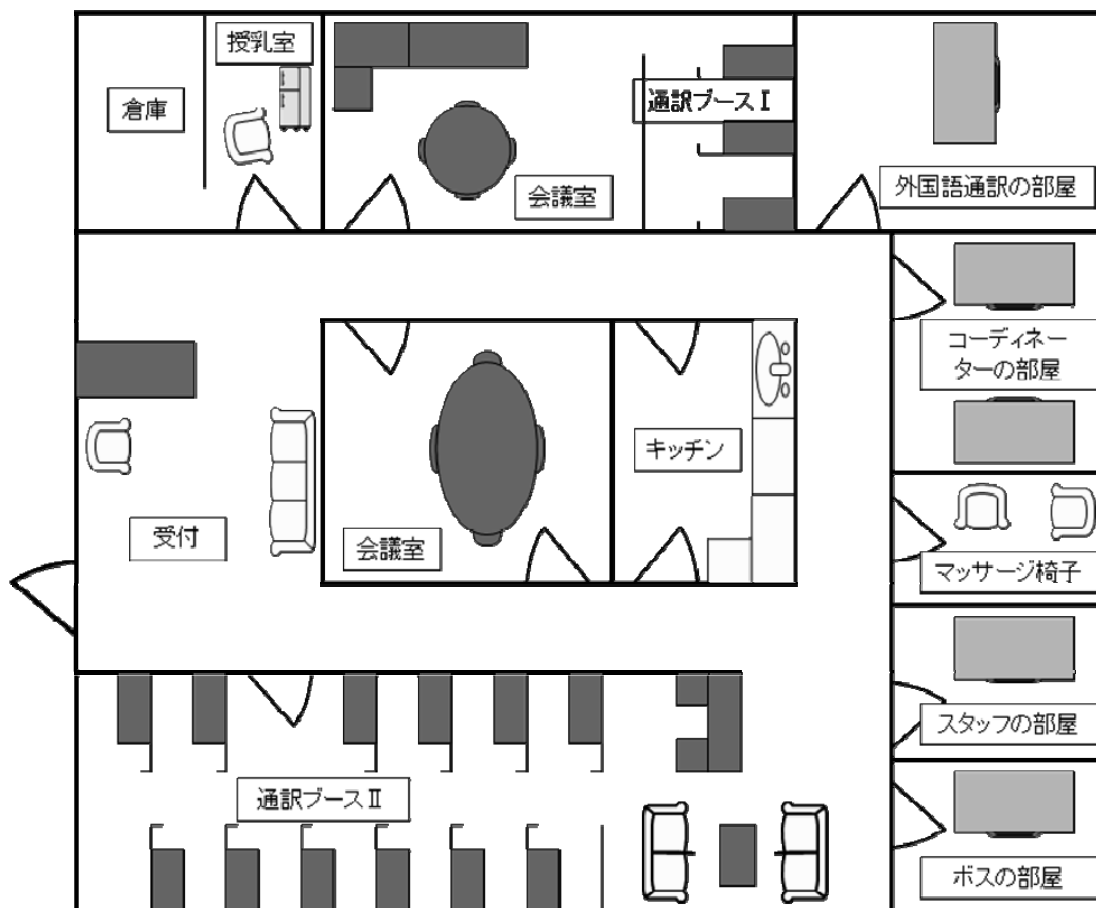


図1 センター内 配置図

Q デンバーのVRSセンターの開室時間は？

平日の朝7時から夜8時。それ以外の時間は、他の開いているセンターが対応している。夜中に開いているセンターは3箇所程あり、ハワイや西海岸など時差のある地域が多い。ろう者にとっては地元の通訳者の方が良いなどの好みもあると思うが、政府の既定で「できるだけ電話をかけたらすぐにつながるようにすること」とされているので、ろう者側がセンターや通訳者を選ぶ余地はない。ただし、男性か女性かという選択は可能となっている。

Q フルタイムで雇用されているスタッフ通訳者の給与は？

最も技術レベルが高く、経験も豊富な通訳者で、年収 5 万ドル（≒500 万円）である。

Q VRS を担当している通訳者は、聴者に対して通訳者であることを名乗るか？

普段は VRS を間に挟んでいることを簡単に伝えるのみである。ただし、ろう者が「説明しないで」と言うこともあるので、必ずというわけではない。

Q 通訳後のろう者からのフィードバックや、技術向上のための研修はあるか？

ろう者からのフィードバックに関しては、技術の問題ではなく、髪の色が気にいらぬ、性格が合わないといった通訳者との相性の問題もあるので、それですぐに通訳者を解雇することはない。

研修については、もともと技術の高い通訳者が多いので、さらなるレベルアップのためのワークショップを提供している。この他に、外部で研修を受けるための費用として、通訳者一人ひとりに年間 300 ドルを支給している。研修ではないが、年間のべ 30 日分のマッサージ代も支給している。

また、北コロラド大学の学生たちのインターンシップも受け入れている。プログラムは 160 時間で、昨年は 2 名在籍していた。

Q 通訳者雇用時の条件は？

まずは全米手話通訳認定資格を持っていることが条件になるが、全米手話通訳認定資格を持っていない場合でも他に特別な技能を持っていれば雇うこともある。RID 認定資格を最低条件としているので、面接をしてみて、VRS やその他の難しい仕事ができる力量があるかを見極めて雇用する。

Q コミュニティ通訳及び VRS の通訳派遣数は？

コミュニティ通訳は週に 200 時間、VRS は週に 400～500 時間である。

---

① Tele Typewriter の略称。キーボード、プリンタなどから構成され、文字をホストコンピューターへ入力したり、逆にホストコンピューターからの出力を印字させる。電話回線や専用線を通じて、2 地点間の情報の送受信に用いられてきた。

② Communication Access Realtime Translation の略称で、速記タイプライターのこと。文字による情報保障手段のうち最も主要な方法の一つとなっている。特殊なキーボードを用いて、複数のキーを同時にタイピングすることで、単語や音節の組み合わせを入力できるものであり、一般的なキーボードよりも少ないキーストローク数で多くの文字を入力できる。白澤麻弓（2008）ICT を用いた聴覚障害学生支援。メディア教育研究，5（2），35-43。

③ 1990 年に制定された Americans with Disabilities Act のこと。通称 ADA 法。障害者への差別を禁じ、機会平等を保障している。

---

---

## 手話通訳者の仕事とデマンド・コントロール理論

---

---

筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター  
准教授 白澤麻弓

### 1. はじめに

Robyn K. Dean 氏、Robert Q. Pollard 氏の両名は手話通訳者であり、ロチェスター大学病院にて手話通訳者の養成を担当している。このうち Dean 氏は、手話通訳に関する研究者でもあり、狭義の手話通訳技術といわゆる手話通訳実践技術の両方を統合した新たな通訳モデルの提唱を目指して研究を進めている。本視察では、2008 年度に引き続き、こうした研究成果についてより詳細なお話を聞くことができた。

本稿では、ここでのお話と両氏の研究論文を元に、白澤（2009）を一部引用しつつ、両氏が提唱するデマンド・コントロール理論に基づいた手話通訳モデルの概要を紹介したい。



写真1 Dean & Pollard 氏  
プレゼンを担当された Dean 氏（右）と  
Pollard 氏（左）。

### 2. Practice Profession としての手話通訳

「手話通訳とはどういう仕事か？」と問われたとき、多くの方は「起点言語としての手話や日本語をもう一方の言語に翻訳し伝える仕事である」と回答するだろう。実際にこうした翻訳作業は手話通訳という仕事のかなりの部分を占めるし、手話通訳者なら誰もこうした翻訳技術を磨きたいと思っていることだろう。

しかし、一方で「これだけではいい通訳者になれない」ことを一番よく知っているのも、他ならぬ手話通訳者自身ではないだろうか。実際、駆け出しの手話通訳者として依頼を受けた現場に行くと、もっともシンプルな講演場面等であっても、主催者側への挨拶をはじめ、通訳の立ち位置や照明の確認、それにとまなう主催者との交渉など、実にさまざまな対応が求められることに気づく。もちろんこれが病院やPTAなど、その場の対人関係が重視される場面ならなおさらで、身のこなしから声のトーンに至るまで、通訳者の行う一つの言動に高度な判断力が要求されることになる。

しかしながら手話通訳者の養成現場では、こうした手話通訳実践にとまなうさまざまな技術は「重要である」ことが強調されこそすれ、その具体的内容を体系的に学ぶことはあまりないのが現状であろう。特に場面に応じた通訳の仕方や立ち居振る舞いは、「ケースバイケース」とか「柔軟に」などの言葉で片付けられがちで、結局のところ現場に「放り込



まれて」から試行錯誤して体得するしかない状況にある。

一方、手話通訳と同様に「人」を対象とし、さまざまな対人コミュニケーションスキルが求められる専門職に、教師やカウンセラー、医師、弁護士などがある。こうした職業は、練習で身につけた技術を持ちながらも、常時変化する現場に対応して高度な専門的判断を常に求められる仕事であることから、Practice Profession（実践に根ざした専門職）と呼ばれている。こうした職業では、常に人と相対し円滑なコミュニケーション関係を築いていく必要があるため、実際に専門職につくまでの養成過程において、場に応じた判断力やコミュニケーション能力を体系的に学ぶのが常識とされている。これに対して、エンジニアや会計士・自動車整備士など「物」を対象とし、その人の持つ技術によって製品を作り出す職業を Technical profession（技術をよりどころとする専門職）という。Technical Profession では、Practice Profession とは対照的に、日々、変わることはない物体などを相手に、ある程度型にはまった仕事をしていくことが求められる。

こうした分類に基づくと、異なる文化の対象者同士をつないでいく手話通訳という仕事は、常に現場での実践力が求められる Practice Profession の代表例であると言える。しかし、その養成においては手話や翻訳の練習といったテクニカルな側面が重視されがちで、通訳者の専門性の基軸となるべき実践現場での対応能力については、十分な指導がなされていないのではないかと Dean 氏は語る。このため、現場で活躍する手話通訳者自身も、実践現場の複雑さを語る言葉をもたず、その対処方法についても十分整理されないまま今日に至っているという。

こうした現状を打破するためにも、手話通訳という職業をあらためて Practice Profession としてとらえ直し、現場における判断力を基軸に据えた養成を行うことで、手話通訳者の真の専門性を反映した新たな手話通訳モデルを提示することができるのではないかと語っていた。

### 通訳作業の実態とは？

2.で述べたように手話通訳者は狭義の手話通訳技術の他に、実践現場におけるさまざまな対応力が求められる職業である。しかし、実際にはこうした対応は表にさらされることが少なく、実際にはまるでなかったかのように扱われることも多い。

Dean 氏は、こうした状況を如術に表すビデオクリップを提示してくれた。以下はその内容である。

チョコレート工場で女性2人が働いている。ベルトコンベアーから流れてくるチョコレートを一つ一つ紙に包み、次の作業員に渡すという仕事。最初は順調に包んでいたが、どんどんベルトコンベアーの速度が速くなる。2人は必死になって包もうとがんばるが、間に合わず、いくつか取りこぼしてしまう。

すると、奥からボスが出てきて、2人を叱る。

「これ以上取りこぼしたらクビよ！」

ベルトコンベアーの速度はさらに速まるが2人は取りこぼしていることが見つからないようにと、間に合わなかったチョコレートを口にパクリ。さらには帽子や服の中に隠して必死にボスの目をごまかそうとする。拳げ句の果てにはほとんどのチョコレートを無駄にしまい、取り繕うだけの作業になってしまう。



写真2 提示されたアメリカのコメディドラマ (I love Lucy [Chocolate factory] )

このビデオクリップでは、ボスは仕事が順調に進んでいると思ってベルトコンベアーの速度を上げている。でも、実際にはまったく仕事ができおらず、ミスがばれないように必死で取り繕っているだけである。これは、通訳現場でもしばしば生じてしまう問題で、端から見れば、きちんと通訳ができているように見えても、実際には通訳できずに漏れてしまった情報があったり、通訳者が一生懸命できていないところを取り繕っているだけの状況も生じうる(!?)。

実際に手話通訳者が行っている作業というのは外から見えにくく、どこでどのような判断をしたのか、どんな風に訳しているのかは通訳者自身でないとわからないことが多い。しかし、手話通訳が Practice Profession である以上、現場のさまざまな状況に応じて失敗することもあるし、極端な対処方法を取らざるを得ない場面も生じる。そのため、こうした現実場面における判断をはっきり表面化して検証していく過程がないと、本当の意味での専門性は育たないのではないかと語られていた。

### 3. 手話通訳者の仕事とデマンド・コントロール理論

Practice Profession として手話通訳者をとらえなおしたとき、この実践現場を理解するために有用な枠組みがデマンド・コントロール理論である (Dean & Pollard, 2001) (図1)。これは、もともと職業メンタルヘルスの分野で、職業人のストレスの度合いを説明するために提唱された理論である (Karasek, 1979)。このうち、デマンドとはその場の環境や人、通訳者個人の要因など、現場を構成する要素のうち課題になりうるものを指す。一方コントロールは、デマンドとしてあげられた課題に対処するために利用することができるリソースのことである。

例えば、学校場面で子どもに対して通訳をするとき、たくさんの子どもの場面で遊んでいるという状況はデマンドのひとつになる。これに対して、通訳者が子ども好きで、かつ小学校現場には行き慣れているという事実はコントロールとなり、現場に存在するたくさんの子どものデマンドに対処するためのリソースとしてとらえることができる。

通訳者が日々出会う現場の難易度はそれぞれまちまちであるが、デマンドとコントロールのバランスがちょうど釣り合っているような場面では、特に問題なく対処ができる。

しかし、状況によっては周囲にいる子ども達が大勢泣き出したり、通訳者の技術が足りなくて話者の話を通訳できないなど、デマンドとコントロールのバランスが崩れることもありうる。こうした状況は、次の4つの組み合わせで説明できる。

- I ハイデマンド・ハイコントロール
- II ハイデマンド・ローコントロール
- III ローデマンド・ローコントロール
- IV ローデマンド・ハイコントロール

このうち、IIは通訳者の手に負えないような現場に放り込まれたような状況で、ここで仕事をする人には大変な負荷がかかる。かといって、IVであれば問題ないかということ、自分のスキルに対して

仕事の負荷があまりにも少なく、仕事に対する面白味が感じられない。また、IIIもある意味ではバランスが取れた状況ではあるが、自ら主体的に仕事の範囲を広げていこうというような積極性は生じず、受動的な態度に終始しがちである。これに対してIは、高いスキルを持った専門家がバリバリと質の高い仕事をしている状況にあてはまり、忙しい現場を抱えているにもかかわらず、非常に楽しく仕事をこなしている状況と言える。大企業の社長や脳外科医が仕事を続けていられるのもハイデマンド・ハイコントロールの状態にあるからで、専門職の職場環境としては最も望ましいとされている。

一方、病院や警察場面の通訳など、手話通訳者が直面する現場は、ハイデマンドであることが多い。にもかかわらず、手話通訳者の多くは「通訳者はあくまでも黒子に徹しなければならない」と教育されており、デマンドをコントロールしないことが求められる。あるいは、コントロールするすべを教わっていないため、ハイデマンド・ローコントロールの状況に陥ることも少なくない。また、実際にはコントロールをしている場合であっても、倫理規範上は中立性が求められていることから、せっかく行ったコントロールの内容を共有することがはばかられ、結局のところハイデマンド・ローコントロールの状態が継承されてしまっているのも現状だと思われる。

しかしながら、手話通訳者がさまざまなデマンドをコントロールしているという事実は紛れもない真実である。しかも、ベテランの通訳者であればあるほど、数多くのリソースを有しているはずである。したがって、まずは通訳者が現実に行使しているコントロールを積極的に認め、これを技術として共有していくことで、手話通訳という専門職をハイデマンド・ハイコントロールの状況に持っていくことが必要だと言えるだろう。

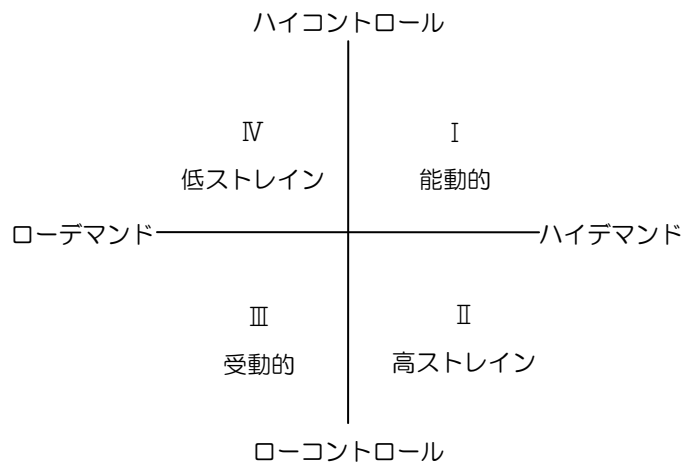


図1 デマンド・コントロール理論のモデル図 (Karasek, 1979)

### Practice Profession としての経験を語るができない通訳者

Dean&Pollard 氏が行うワークショップでは、通訳者が行っているコントロールに意識を向けるため、次のようなアイスブレイクを取り入れている。これは、通訳場面で生じるさまざまな問題に対し、実際に体験したことがある場合には空欄にサインをするというもので、各自自己紹介をしながら相手にリストを見せ、サインを集めていく。

表1 ワークショップで用いるリスト

大統領の通訳をしたことは？		(該当する人のサインを集める)
汚い言葉を通訳しなかったことは？		
舞台でつまづいたことは？		
音声がはっきり聞こえないのに適当に文章を作って訳したことは？		
救急救命室で患者に水をとってきてあげたことは？		
有名人の通訳をしたことは？		
通訳後、対象者を車で送って行ってあげたことは？		
通訳中に気絶したことは？		
間違った情報が話されていたので、通訳中に訂正してあげたことは？		
本当は聞こえているのに通訳しなかったことは？		
現場で笑いが止まらなくなったことは？		
患者の手を握っていてあげたことは？		

このレクリエーションは通訳者に大変人気で、皆よろこんで自分の名前をサインするらしい。にもかかわらず、レクリエーション終了後に実際にサインした通訳者に対してそのときの状況を尋ねると、一様に申し訳なさそうに口を閉ざしてしまう。これは、表にあげられている行動の多くが、手話通訳者の倫理規定上そぐわないとされている行動だからである。しかし、これだけ多くの通訳者がサインをするということは、実際に通訳場面の中ではこうせざるを得ない場面も生じるということで、実際の通訳現場と倫理規定として語られている内容に矛盾があるのではないかと Dean 氏は語る。そのため本来であれば、実際に正しい行動であったのか検証していくべき内容について、かえって実態を見えにくくしてしまっているのではないかとのことである。従って、倫理規定で語られている「べき論」を一度とりのぞき、通訳現場の実態を見ていくことが重要であろうと述べられていた。

#### 4. 通訳現場に存在するデマンドのタイプと内容

Practice Profession としての手話通訳技術を高め、共有していくためには、現場で生じるデマンドを正確に把握するとともに、どのような状況でどんなコントロールを利用したのかを適切に記述していく必要がある。

特に、デマンドを正しくとらえる力は重要で、通訳者の養成の中でもまずはじめに取り入れるべき内容であるとのことである。Dean 氏によると、さまざまな現場におけるデマンドは表2に示したように4つのタイプに分けられる。

表2 現場におけるデマンドの種類

タイプ	内容	例
環境的デマンド Environmental	通訳者がおかれた現場におけるデマンド 場の目的、使用されている言葉、物理的環境、人など	病院通訳における機械音、におい、多数の医師の存在など
人間間デマンド Interpersonal	場を構成する人物（ろう者・聴者）との関係から生じるデマンド 場の雰囲気や力関係、思考世界の違いなど	対象となるろう者と周りの人々との関係、文化の違いなど
非言語的デマンド Paralinguistic	話者の非言語的情報に起因するデマンド 声の大きさ、速さ、アクセント、姿勢など	講演における不明瞭で聞き取りづらい話し方など
個人内デマンド Intrapersonal	通訳者の感情や思考から生じるデマンド 通訳内容やその場の状況に対する心理的反応など	教育場面における通訳なのに子ども嫌いであることなど

通訳者の養成では、ある場面を提示し、その場に存在するデマンドをできるだけ細かく分析させるとよいとのことであった。例えば、本視察の際に提示してくれた練習方法は、写真を見ながらその場に存在するデマンドを分析するという方法で、精神科の病院にて通訳を行うとの場面を想定して、生じることが予測されるデマンドをできるだけ多く列挙していくという方法がとられていた。

#### デマンド分析の練習例

ここに1枚の写真があります。これは精神科の閉鎖病棟で、写真に写っている少女は自殺を企図した患者です。以前医療スタッフに対して、暴力をふるった経験もあるということです。医師はこの患者に対して、「何かあったらいけないので、3日はこの部屋から出さない」と伝えようとしています。この場面で通訳をすることを想定し、場におけるデマンドを列挙してください。

<デマンドの例> （順不同にデマンドをあげた後、講師とともに4つのタイプに分類）

- ・閉鎖病棟という環境【環境的デマンド】

- ・それによる通訳者の恐怖心【個人内デマンド】
- ・患者と通訳者の人間関係【人間間デマンド】
- ・医師の体勢【環境的デマンド】
- ・しゃがんで通訳をしたときのつらさ【個人内デマンド】
- ・医師の声（ソフトな声）【非言語的デマンド】
- ・患者の位置【環境的デマンド】
- ・暗い明かり 【環境的デマンド】
- ・恐怖心を与える物【環境的デマンド】
- ・患者からの暴力による恐怖 【個人内デマンド】
- ・通訳内容（罰則を伝えに来ている）【環境的デマンド】
- ・患者と医師との関係【人間間デマンド】
- ・患者の手話の小ささ 【非言語的デマンド】
- ・話のわかりづらさ 【環境的デマンド】

## 5. 現場における意志決定プロセス

前節までに述べてきたとおり、手話通訳場面にはさまざまなデマンドが存在する。しかも、実際の通訳場面では、数多くのデマンドが同時に存在し、これらが拮抗している場面も少なくない。こうした状況では、主要なデマンド（Main Demand）と同時並行的に生じているデマンド（Concurrent Demand）の両方を把握し、最大限それらを考慮した上で最善の判断を下していく力が求められる。

たとえば、PTAなどのディスカッション場面で、発言者の声が聞こえなかったとき、この主要なデマンドに対する対処方法はいくつもの案が考えられる。「もう一回言ってくださいと伝える」「ろう者に依頼してお願いをしてもらう」「話し手の方を見てアピールする」「聞こえづらかった部分を想像で補う」などがその例であろう。

しかし、こうした場面にはいくつもの同時並行的に生じるデマンドがあり、これらを考慮に入れると自ずと選択肢が狭まり、その場におけるベスト、あるいはベターな対処方法というのが決まってくる。

たとえば、先ほどの状況で和気藹々と話をしているような場面では、「もう一度言ってください」とお願いすることも

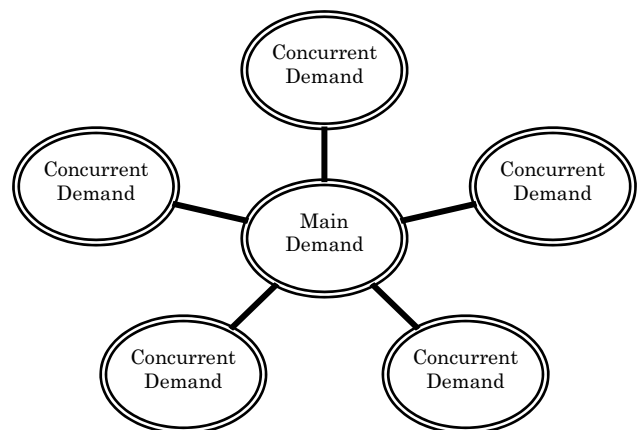


図2 メイン・デマンドと同時並行的に生じるデマンドの関係図

できるが、とても深刻な場面で泣きながら話しをしているような状況では、とてもそのようなお願いができないなどである。

したがって、場面における対処方法を決定していくためには、その場面で生じているデマンドとその関係性を正しくとらえ、分析する力が求められるといえる。

一方、こうして出てきた選択肢の中には、一般的に広く用いられている方法からより柔軟でリベラルな方法、あるいはより消極的で保守的な方法まで、性質に幅があるものと考えられる。先の例でも「もう一度言ってください」と発言する方法は、よりリベラルな対処方法であるし、一生懸命聞くという解決方法はより保守的であるといえる。

しかし、いずれも通訳倫理にはかなった方法であるといえ、あるデマンドの状況下ではすべて効果的な方法といえる。Dean氏はこうした関係性を図3のようにまとめている。

ここで注意すべき点は、倫理的・効果的決定にはいくつもの選択肢が存在するということである。加えて、通訳者が取りうる行動の中には、倫理的・効果的ではない選択肢も存在し、これらは不適切な対応とみなされる。さらに、不適切な対応の中には、リベラルすぎるもののみではなく、保守的すぎるものも不適切とみなされることがある。一般的に手話通訳者の世界では、中立性、透明性が求められ、黒子に徹することが美德とされてきた風潮がある。そのため、リベラルすぎる対応を極力控え、現場に手を出さないことを指導されてきた。しかし、狭義の通訳作業以外に何もしないという態度も不適切になりうるわけで、この危険性についても十分認識しておかなければならないといえる。

ここで注意すべき点は、倫理的・効果的決定にはいくつもの選択肢が存在するということである。加えて、通訳者が取りうる行動の中には、倫理的・効果的ではない選択肢も存在し、これらは不適切な対応とみなされる。さらに、不適切な対応の中には、リベラルすぎるもののみではなく、保守的すぎるものも不適切とみなされることがある。一般的に手話通訳者の世界では、中立性、透明性が求められ、黒子に徹することが美德とされてきた風潮がある。そのため、リベラルすぎる対応を極力控え、現場に手を出さないことを指導されてきた。しかし、狭義の通訳作業以外に何もしないという態度も不適切になりうるわけで、この危険性についても十分認識しておかなければならないといえる。

## 5. まとめにかえて

本稿では、Dean & Pollard氏の提唱するデマンド・コントロール理論について概観することで、新たな手話通訳の見方とこれに根ざした養成のあり方について論じてきた。日本においてはろう者に対する福祉的援助の観点から、比較的現場における実践力の必要性が強調されてきた傾向はあるが、その技術が体系化されていないという意味ではアメリカと共通した状況にあるだろう。特に現場の状況を正確に分析し、用いたコントロールが本当に正しかったのか検証していくプロセスは我が国でも非常に重要な内容であるといえ、今後養成現場への導入について検討していく必要性を感じた。

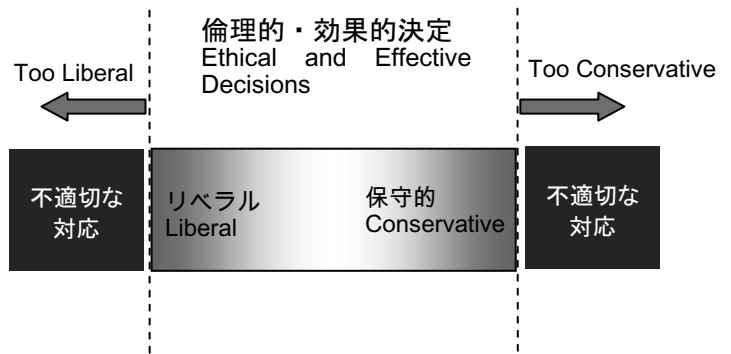


図3 倫理的・効果的決定の範囲

Q このような現場での実践力や判断力は教育によって伸ばせるものなのか？

実際に現場のデマンドを正しくとらえる練習をしていくと、場面の分析力は著しく伸びる。ただ、はじめから通訳現場を対象にしてしまうと、場面が複雑すぎて何から見ればいいのかかわからない。そのため、最初は聞こえる人同士の会話や活動場面で、できるだけ身近な例を教材にして練習するとよい。

また、こうしたトレーニングは手話を学習し始めるのと同時に実施していくことが重要。近年の医学教育でも、1年生のはじめから患者に出会い、彼らとの接し方を学んでいる。こうすることで、テクニカルな技術の成熟と同時に実践技術を高めていくことができる。

Q デマンドの種類のうち、人間間デマンドの中で「思考世界」という言葉が出てきた。話者の思考世界を把握する力というのは通訳者にとって非常に重要だと思うが、この養成方法は？

若いうちからとにかくいろいろな世代・業種の人とあって、話す機会を与えると良いと思う。特に、実際の場面でまず学生達に話者がどのように考えているのかを想像させ、デマンド分析などを行った後に、話者に対して実際にはどうしているのかを聞いてみるといい。こうして直にさまざまな人の考え方を聞くことで、他人の思考世界に対して興味を広げることができる。

**参考文献**

- Robyn K. Dean & Robert Q. Pollard (2001) Application of demand control theory to sign language interpreting: Implications for stress and interpreter training. *Journal of Deaf Studies and Deaf Education*, 6(1), 1-14.
- Robyn K. Dean & Robert Q. Pollard (2005) Consumers and service effectiveness in interpreting work: A practice profession perspective. In Marc Marschark, Rico Peterson, Elizabeth A. Winston (Eds.), *Interpreting and interpreter education: Directions for research and practice*. New York: Oxford University Press.
- Robert Q. Pollard & Robyn K. Dean (Eds.) (2008) *Applications of Demand Control Schema in Interpreter Education*. Deaf Wellness Center: University of Rochester School of Medicine.
- 白澤麻弓 (2009) 対人専門職 (Practice Profession) としての手話通訳者—手話通訳モデルのパラダイム変換—。聴覚障害学生サポートネットワークの構築をめざして—アメリカ視察「医療分野で活躍する聴覚障害者の職場・教育環境」報告書. 60-64.



---

---

特別寄稿

---

---



---

---

～ 特別寄稿 ～

## 音声通訳者から見たアメリカにおける手話通訳者養成と それを取り巻く環境

---

---

大東文化大学 経済学部  
教授 近藤正臣

### 1. はじめに

筑波技術大学による手話通訳養成に関するアメリカ視察に通訳として同行する機会をえた。私自身は日英の音声通訳者の2人のうちの一人として同行した。言語通訳者としてはさらに、日本語-日本手話通訳者2人がついた。私が最後にアメリカを訪れたのが2003年3月、知人の墓参に行ったときであるので、今回は7年ぶりのアメリカ訪問となった。40年以上も通訳職をしているが、通訳をすることはいつも勉強の機会でもあった。今回の仕事でもまったくその通りであった。以下、音声会議通訳者、通訳研究者、経済学など社会科学の学徒として、どんなことを学んだのか、どんなことを感じたのかを記してみたい。

これから述べるものは、私感であり、乏しい知識に基づいたものであるし、一般化がすぎるところもあるかもしれない。権威ある手話通訳観だとかアメリカ観だというつもりはさらさらない。しかもノースイースタン大学でDennis Cokely氏も言っていたが、手話通訳者の訓練・理論化にかかわっている人たちは、「これまでの一生涯の仕事なのだ、そんなに簡単には話せないよ」と言うのである。これをここでいとも簡単にまとめてしまうのは公平とは言えないかもしれない。

### 2. 手話通訳者の訓練およびその理論的基盤、音声通訳との違いについて

はじめに日米両国において手話通訳者の訓練がどのようにしておこなわれているかについて一言だけ述べたい。日本ではそのほとんどが自治体などの行っている1週間に1度の市民講座で行われていて、一般に専門的な養成を行っているのは、国立障害者リハビリテーションセンター学院（以下、国リハとする）と世田谷福祉専門学校と全国に2校しかないと言われている。これら2校も大学ではなく、もちろんこれを行う大学院はない。上の2校のうちのひとつ、国リハの学院手話通訳学科では、2年間で日本手話を学び、同時に通訳技能も学ぶことになっている。これに対して、アメリカでは130校もの大学・大学院で手話通訳者の養成が行われており、中にはとても整った遠隔地教育が行われている大学もあり、スクーリングを必須としているほかは、自宅で学士号までとれるようになっていることを知った。

国リハでは、基本的にアメリカの多くの大学で教えられている科目と同じ科目を教えているとのことであるが、アメリカでは教授陣が理論化に力を尽し、卒業後の実際の仕事場の状況をも理論化して示していることがよくわかった。もちろん、理論化して通訳のプロセスを整理してみることによって、隠れていた要因が浮かび上がることがあるし、これは通訳者養成の手法にも影響を与える。これがそもそも理論化の意味である。さらに、「理論があるのだ」ということを示し、その内容をより広くわかってもらえることによって、手

話通訳者の社会的・経済的地位向上に役立つ。通訳プロセスの理論化においては、Cokely 氏のモデルがあり、これは基本的に音声通訳のモデルと同じではないかとの印象を持った。Danica Seleskovitch 氏の意味の理論、Helga Kirchoff 氏と私が言っている「3者2言語モデル」である。Cokely 氏が音声通訳のモデルを参考にしたのかなどの点をたずねる時間がなかったが、理論化では両者の協力がおおいに可能であるし、有益ではないかという感触を得た。実は、ウィーンの Franz Poehhacker 氏から Cokely 氏のことは聞いていて、いつかどんなことをしているかについて話をしようと言いつつ、結局、今回はそのような時間はないままに終わってしまった。

アメリカにおける手話通訳のあり方自体について、感心したことがあと3点ある。ひとつは、訓練者・研究者が共同研究をしていて、それぞれのしていることを公にして比較し、どの方法がより大きな成果を挙げているかということを確認しようとしていること、2つめは、手話通訳者を目指す学生に対して、何を教えるべきか、何をマスターさせるべきかについて、共通の基準を出していることである。3つ目は、手話通訳サービスをろう者のコミュニティに提供するにあたって、いったいどのようなニーズがあるのかを、かなり大きな研究をしてみようという点である。

この1点目について、いかにしてこのようなことが可能であるのかを少しだけ考えてみたい。日本において同様の努力は、日本通訳翻訳学会で「通訳教育や語学教育の理論研究・実践」というプロジェクトが進行しており、特に語学教育に通訳訓練の手法を導入する道として有効なものにするにはどうしたらよいかという点について、検証作業が続いているが、この他にこのような共同の努力については、寡聞にして知らない。ひょっとしたら日本では、このように自分のしていることの手の内を公開して比較しつつ改善していくという道は行われにくいかもしれない。イニシアティブをとって精力的に他の学校・研究者に呼びかける人物がいるかどうかということも関係しようが、大きくは、いわば学界の気風あるいは文化と言っても良いようなものが関係してくるのかもしれない。日本については、かつて丸山真男が言った「たこつぼ型」の学問のあり方という表現が思い起こされる。しかし、このような文化・気質を口実として何もしないという面があるとすれば、当事者としてはこの面をより心すべきであろう。これはもちろん手話通訳者養成や手話通訳サービスの提供だけにかかわることではない。



写真1 言語通訳チーム

## 2. アメリカにおけるろう者・聴覚障害者に対する情報保障サービスについて

アメリカにおけるろう者・聴覚障害者に対する情報保障サービスについて、さらに2点に分けて考えてみたい。ひとつは、手話通訳者が仕事をする現場からの要求、それらへの対応について Demand-Control analysis という理論があること、そのことから、手話通訳者と音声通訳者の現実の仕事場の違いについて考えてみることである。2つ目は、アメ

リカでは、はるかに広く手話通訳サービスが提供されていることである。

まず、1 点目について述べたい。音声英語—ASL の通訳者が実際の現場で果たすことを期待されている役割には、音声通訳者が期待されているものとは少し違ったものがあり、この解決に動員できる資源にも限度がある。これを理論的に説明して、外部に説明もし、内部で通訳者の養成・トレーニングに活用しようという試みがあることがわかった。それが Demand-Control analysis である。この理論については、本報告書の白澤氏の報告に詳しい（46 頁参照）。



写真2 ノーススイースタン大学にて

こうなると、音声通訳者の果たすべき役割・その解決に動員できる資源を分析しようという試みにはいったいどのようなものがあるのだろうかと思いをさせることになる。また、音声通訳者と手話通訳者の期待されている役割にはかなりの違いがあるのではないかとこのことを考えても良いことに気づく。音声通訳者の現場としては音声言語を異にするものを考える。例えば、国連やその専門機関（ILO、WHO など）の場合、その参加者は国家、国を異にする団体・組織（企業、労働組織、研究機関など）やその

他（外国から講演者がきて講演をするなど）が考えられる。参加者が自身はひとりの人間だがプライベートな存在よりも大きなもの（マクロ）を代表して発言をしているのだと言ってもいいかもしれない。それに対して手話通訳者の場合には、コミュニティーに出て行く参加者がプライベートな存在（ミクロ）であるし、用件も自分自身のことだと言う場合が多い。何度でも例にでてきているのは、自分のためのピッツアの注文をするというような場合になる。ある講師の用語では、「intimate」なセッティングで働くことを要求されることが多いと言えるかもしれない。もちろん、1 国内でも音声言語の通訳が行われていることがある。音声通訳においても、法廷通訳者・医療通訳者・コミュニティー通訳者はいて、参加者は個人で、その場面・かかわる利害は「intimate」である。

次に 2 点目について。アメリカには、PEPNet（Postsecondary Education Programs Network）という全米を 4 地域に分けてテクニカルアシスタントセンターを置き、それらを統括する全国的な組織がある。ここに言う「Postsecondary」というのは高等学校以上ということで、つまり大学教育を指し、聴覚障害者に大学教育の機会を提供するための種々のノウハウや情報提供をしている。日本では、PEPNet-Japan があり、筑波技術大学内に事務局が置かれていて、多くの活動を行っている。また、アメリカでは多くの大学で、教員が ASL を使って授業をすることもあれば、手話通訳者が教室に入って、ろうの学生のために授業を ASL に通訳しているところがあるようだ。今回、私たちが訪問した RIT（ロチェスター工科大学）では、連邦政府が予算を提供して、上に述べたようなろう者の学生へのサービスを提供している。

アメリカでもっと大規模にろう者の社会参加を実現しているのが VRS である。実は、この視察旅程には、コロラド州デンバーで通訳エージェンシーを訪問すると書いてあったので、私はてっきり、音声通訳者を手配するエージェンシーを想定していた。これはとんでも

ない間違いであった。実際にこの通訳エージェンシーに行って説明が始まると、最初の言葉は、「これは、聴者が電話を使うように、ろう者もいつでも誰にでも話ができるようにするためのサービスです」というものであった。今考えると、ごく当たり前の、やさしい英語なのだが、その時には、このようにとにかく日本語にしたのだが、その意味がわからないままに、とにかく英語ではこう言っていると理解できたものを必死で通訳したという記憶がある。



写真3 Purple社にて

VRSとはビデオリレーサービスの略号で、ろう者は自分の持っているパソコンあるいは専用の端末から、手話通訳者を呼び出し、手話で話すと、通訳者がこれを音声英語に通訳して、聴者の受け手まで届けるというサービスである。しかもこれを連邦政府が国家事業として、民間企業に請け負わせて、ろう者に対する無料の公共サービスとして行っている。ろう者は通訳料をいっさい払わずに、無料で

このサービスを利用できる(41頁参照)。

日本でも音声通訳だけの電話通訳というサービスがあり、日英語、日中語間などで、KDDI、Nスピーク、Glova、Advantisなどの企業がこれを有料で、商業ベースで提供していることがインターネットでもわかる。アメリカでは、これと同じサービスを、ろう者を対象に、無料で、連邦政府が国家予算をつかって提供しているのである。最後に、このことの意味を、以下、もうすこし大きくとらえてみたい。

### 3. アメリカ社会の発達と手話通訳サービスの位置づけ

アメリカで手話通訳者たちが前述のように活躍をしていることを、アメリカの歴史のなかに位置づけてみたい。アメリカではADA法が1990年に連邦議会を通過している。ブリタニカ国際大百科事典(デジタル辞書版)によると、これは「心身に障害や病気を持つ人々が「社会に参加する権利を保障し、そのための必要な条件の整備を政府、企業などに義務づけた法律」とある。先に述べたVRSはこの法律に基づいて、連邦政府が聴覚障害者の社会参加を保障するために、その人たちの権利として提供しているサービスだということになる。1986年に全米障害者評議会が障害者への社会的差別撤回運動として法制化を提起したものであり、1964年の公民権法以来の大前進と評価されることもある。

こうしたアメリカを、たとえば大学の同僚で小説家、畏友中村邦生氏のように、「互助の精神の厚みのある社会」とすることもできるし、別の友人の言うように、「最弱者にとり生活しやすい社会」とすることもできよう。私は、独立戦争の時に掲げた理想を、ゆっくりとながら、ときにはその歩みが止まりそうになることもありながら、それでも着々と達成しつつあるアメリカがここにあるように思える。その里程標のひとつがADA法であると私には見える。

#### 4. おわりに

アメリカの植民地が独立戦争を戦ったときの重要な文書に、「独立宣言」がある。なぜ、宗主国イギリスと戦争をしてまで独立を目指すのかということを確認しようとしたもので、ここには、わたしたちが戦争までして独立を達成したいと思うのは、人間はみんな平等で、生命・平等・幸福追求の権利があるということが当たり前だと思われるような社会を作りたいからである、とある。

もちろん、独立宣言の理念がそのままただちに現実になったわけではなかった。だからこそキング師の指導する公民権運動が必要だった。しかし、私が知らない間にアメリカでは、ろう者・難聴者への差別をなくし、社会参加を保障する法律が通り、それが実施されていた。たしかに、公民権運動のあとも、ベトナム戦争・イラク戦争で他国を傷つけながら自らも傷ついたアメリカ、レーガン・ブッシュの新自由主義時代に所得格差が大きく開いたアメリカ、ウォール街の貪欲資本主義のアメリカがある。しかし、それとは別のアメリカが頑として存在しているような気がする。オバマ大統領はジョージ・W・ブッシュのアメリカからの「変化」を求めたが、アメリカはいつも変化していた。

ここは、世界におけるアメリカの立場について全面的に論じるところではないが、私は、アメリカという国には2つの側面が同時にあると思っている。ひとつは、一国民国家として国益をむき出しにして世界にぶつかっていく側面、もうひとつは、優れた意味での「近代」の波頭に立って、「近代」を広めようという役割を持つという側面である。日本を含めて弱い国は、これを厳しく峻別したうえでその対応を決める必要があると思っている。この峻別で誤ると、ひどい目にあう。

「屋上家を架す」ことになるのを重々承知の上で、こうしたアメリカのあり方から、ひるがえって日本の課題も見えてくるのではないかと言いたい。僭越きわまりないことながら、現在の日本において、地道な努力を続けておられる関係者の方々に、深い敬意を表したい気持ちである。

---

---

## 巻末資料

---

---

- ・ 視察資料の日本語訳にあたって ..... 62
- ・ Rubrics (ノースイースタン大学) ..... 63
- ・ Entry-to-Practice Competencies (北コロラド大学 DOIT センター) ..... 83

各視察地の報告の中でご紹介した手話通訳技術の評価に関する資料を巻末資料としてここにまとめてご紹介したい。  
なお巻末資料をお読みいただくにあたり、次頁に掲載されている翻訳者からの留意事項をご一読いただければ幸いです。

## 視察資料の日本語翻訳にあたって

今回の視察から持ち帰った資料のうち、手話通訳者の評価基準に関する資料を中心に何点かの翻訳を担当した。これらの評価基準は、当然のことながらそれぞれの大学で行っている養成プログラムと密接な関係があり、本当に責任ある翻訳を手掛けるには、その養成プログラム全体をきちんと把握しなければならない。しかし今回は視察という限られた時間の中で得られた情報だけを頼りに翻訳を行ったため、中には必ずしも評価項目の意図を忠実に捉えていない部分があるかもしれない事をご了承いただきたい。なお、いくつかの英単語の訳について、以下の通り補足する。

1. 「client (クライアント)」は「通訳利用者」と訳した。「被通訳者」「利用者」あるいは「クライアント」などの訳も考えられるが、日本では「利用者」というと、単にろう者の事を言う場合が多いのが現状である。しかし実際には聴者も利用者に含まれる。そのため、「通訳利用者」とすることで、できるだけ正しく、そして自然な訳を目指した。
2. 「Affect」という言葉は、人が話している場合は「感情」と訳し、文章については「情緒」という訳で統一した。
3. 「Presence」という言葉の訳は、大変な苦勞をともなった。同じノースイースタン大学であっても資料によって、若干意味の違いがあった。このため、一つの和訳で、すべての個所に対応するのは適切ではなかった。ノースイースタン大学の通訳成果に関する4段階評価に「presence」という言葉が登場するが、ここではむしろこの言葉にとらわれず、大胆に外して、「入門レベル」「発展レベル」「実践レベル」「熟練レベル」とした。
4. 「discourse」は「談話」、「dialogue」は「対話」、「conversation」は「会話」とそれぞれ訳した。

翻訳責任者 高木真知子  
翻訳協力 瀧澤亜紀 岡典栄



---

---

## Rubrics

(ノースイースタン大学)

---

---

ここに掲載する「Rubrics」は、Dennis Cokely 氏および Rico Peterson 氏によって、ノースイースタン大学で行われる ASL 通訳者養成プログラムのために作られたものです。

The rubrics as created for use in the Northeastern University ASL Interpreting Program, by Dr. Dennis Cokely and Dr. Rico Peterson.

## Interpretation Outcomes Competencies Rubrics

<b>BEGINNING PRESENCE</b> little evidence of control	<b>EMERGING PRESENCE</b> consistent evidence of external control	<b>STRONG PRESENCE</b> consistent pattern of developing internalized control	<b>MATURE PRESENCE</b> task is accomplished effortlessly; self-regulation
---	---	---	--

### TARGET LANGUAGE PRODUCTION INTERFERENCE

If beginning or emerging, use Language Outcomes Rubric

production issues are of such prevalence that they significantly disrupt comprehension	production issues are of such prevalence that they frequently disrupt comprehension	production issues rarely disrupt comprehension	production issues do not disrupt message comprehension
--	---	--	--

### LANGUAGE MATCH

little evidence of being guided by the language used by the interactant(s)	emerging evidence of linguistic and cultural behaviors that are guided by the language used by the interactant(s)	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that are appropriately guided by the language used by the interactant(s)	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that are appropriately and effortlessly guided by the language used by the interactant(s)
--	---	---	--

#### Overall LANGUAGE MATCH

- supports the source message
- skews the source message

### STYLE AND/OR REGISTER

little evidence of being guided by the style and/or register used by the interactant(s)	emerging evidence of being guided by the style and/or register used by the interactant(s)	consistent evidence of being appropriately guided by the style and/or register used by the interactant(s)	consistent evidence of being guided appropriately and effortlessly by the style and/or register used by the interactant(s)
---	---	---	--

The IEP Outcomes Project is a cooperative venture of the Interpreter Education Programs at:  
 Northeastern Univ., Univ. of Southern Maine, Univ. of New Hampshire,  
 St. Catherine's Univ., Eastern Kentucky Univ., NTID  
 Outcomes Project is sponsored in part by NIEC, RSA#H160B050002

### 通訳成果の評価項目(ルブリック)

<b>入門レベル</b> 統制(コントロール)がほとんど確認できない	<b>発展レベル</b> 外的統制が一貫して確認できる	<b>実践レベル</b> 内的統制を一貫したパターンで生み出すことができる	<b>熟練レベル</b> タスクを軽々とこなす。自己統制ができている
---------------------------------------	--------------------------------	--	---------------------------------------

#### 目標言語の表現の困難

入門レベルまたは発展レベルの通訳者の場合は、言語成果評価項目を使用する

訳出の問題が余りにも目立ち、理解を著しく妨げている	訳出の問題により、しばしば理解し辛いことがある	訳出の問題が理解の妨げとなることは殆どない	訳出の問題により、メッセージが理解し辛いことは全くない
---------------------------	-------------------------	-----------------------	-----------------------------

#### 言語のマッチング

各々の話者が使用する言語に合わせて通訳している様子がほとんど見受けられない	各々の話者が使用する言語に合わせた言語的、文化的対応が見受けられようになってきている	各々の話者が使用する言語に適切に合わせた言語的、文化的対応が常に見受けられる	各々の話者が使用する言語に適切・且つ自然に無理なく合わせた言語的・文化的対応が常に見受けられる
---------------------------------------	--	--	---

#### 言語マッチングの総合評価

- 起点言語のメッセージを正しく伝えている
- 起点言語のメッセージを歪めている

#### スタイルおよび／又はレジスター(言語形態)

各々の話者が使用する言語のスタイルおよび／または言語形態に合わせて通訳している様子がほとんど見受けられない	各々の話者が使用する言語のスタイル及び／または言語形態に合わせて通訳する様子が見受けられるようになってきている	各々の話者が使用する言語のスタイルおよび／または言語形態に合わせて、一貫して適切に通訳する様子が見受けられる	各々の話者が使用する言語のスタイル及び／または言語形態に合わせて、一貫して適切・且つ自然に無理なく通訳している
---	---	--	---

## Interpretation Outcomes Competencies Rubrics

<b>BEGINNING PRESENCE</b> little evidence of control	<b>EMERGING PRESENCE</b> consistent evidence of external control	<b>STRONG PRESENCE</b> consistent pattern of developing internalized control	<b>MATURE PRESENCE</b> task is accomplished effortlessly; self-regulation
---	---	---	--

### STRATEGIC MANAGEMENT

#### Source Text Information Management

little evidence of managing the source text information	emerging evidence of linguistic and cultural behaviors that manage source text information	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately manage the source text information	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately and effortlessly manage the source text information
---	--	--	---

#### Interpretation Process Management

little evidence of managing the interpreting process	emerging evidence of linguistic and cultural behaviors needed to manage the interpreting process	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that are needed to appropriately manage the interpreting process	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that are needed to appropriately and effortlessly manage the interpreting process
--	--	---	--

#### Situation Management

little evidence of managing the participants and environment	emerging evidence of linguistic and cultural behaviors that manage the participants and environment	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately manage the participants and environment	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately and effortlessly manage the participants and environment
--	---	---	--

The IEP Outcomes Project is a cooperative venture of the Interpreter Education Programs at:  
 Northeastern Univ., Univ. of Southern Maine, Univ. of New Hampshire,  
 St. Catherine's Univ., Eastern Kentucky Univ., NTID  
 Outcomes Project is sponsored in part by NIEC, RSA#H160B050002

### 通訳成果の評価項目(ルブリック)

<b>入門レベル</b> 統制がほとんど確認できない	<b>発展レベル</b> 外的統制が一貫して確認できる	<b>実践レベル</b> 内的統制を一貫したパターンで生み出すことができる	<b>熟練レベル</b> タスクを軽々とこなす。自己統制ができている
-------------------------------	--------------------------------	--	---------------------------------------

#### 目的に対応した処理(マネージメント)

##### 起点言語の情報の処理

起点言語文の情報を処理している様子がほとんど見受けられない	起点言語文の情報を処理するために必要な、言語的、文化的対応が見受けられるようになってきている	起点言語文の情報を適切に処理するために必要な言語的、文化的対応が一貫して見受けられる	起点言語文の情報が適切かつ自然に無理なく処理するために必要な言語的、文化的対応が一貫して見受けられる
-------------------------------	--	--	--

#### 通訳プロセスの調整(マネージメント)

通訳プロセスを調整している様子がほとんど見受けられない	通訳プロセスを調整するために必要な言語的、文化的対応が見受けられるようになってきている	通訳プロセスを適切に調整するために必要な言語的、文化的対応が一貫して見受けられる	通訳プロセスを適切かつ自然に無理なく調整するために必要な言語的、文化的対応が一貫して見受けられる
-----------------------------	---	--	--

#### 通訳現場の調整(マネージメント)

現場の参加者及び環境に合わせた調整がほとんど見受けられない	現場の参加者及び環境に合わせた調整を行うために必要な言語的、文化的対応が見受けられるようになってきている	現場の参加者及び環境に合わせた調整を行うために必要な言語的、文化的対応が一貫して見受けられる	現場の参加者及び環境に適切かつ自然で無理なく合わせた調整を行うために必要な言語的、文化的対応が一貫して見受けられる
-------------------------------	--	--	---

## Interpretation Outcomes Competencies Rubrics

<b>BEGINNING PRESENCE</b> little evidence of control	<b>EMERGING PRESENCE</b> consistent evidence of external control	<b>STRONG PRESENCE</b> consistent pattern of developing internalized control	<b>MATURE PRESENCE</b> task is accomplished effortlessly; self-regulation
---	---	---	--

### Ergonomic Management

little evidence of managing physical and psychological sources of stress	emerging evidence of linguistic and cultural behaviors that manage the physical and psychological sources of stress	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately manage the physical and psychological sources of stress	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately and effortlessly manage the physical and psychological sources of stress
--	---	---	--

### Overall STRATEGIC MANAGEMENT

- supports the source message
- skews the source message

### DISCOURSE LEVEL PROCESSING

Little or no evidence of creating cohesion and coherence at the discourse level	emerging evidence of linguistic and cultural behaviors that create cohesion and coherence at the discourse level	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately create cohesion and coherence at the discourse level	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately and effortlessly create cohesion and coherence at the discourse level
---	--	--	---

### Overall Discourse Level Processing

- supports the source message
- skews the source message

The IEP Outcomes Project is a cooperative venture of the Interpreter Education Programs at:  
 Northeastern Univ., Univ. of Southern Maine, Univ. of New Hampshire,  
 St. Catherine's Univ., Eastern Kentucky Univ., NTID  
 Outcomes Project is sponsored in part by NIEC, RSA#H160B050002

### 通訳成果の評価項目(ルブリック)

<b>入門レベル</b> 統制がほとんど確認できない	<b>発展レベル</b> 外的統制が一貫して確認できる	<b>実践レベル</b> 内的統制を一貫したパターンで生み出すことができる	<b>熟練レベル</b> タスクを軽々とこなす。自己統制ができている
-------------------------------	--------------------------------	--	---------------------------------------

### 人間工学的処理(マネージメント)

身体的および精神的なストレスの処理がほとんど確認できない	身体的及び精神的なストレスの原因を処理するために必要な言語的、文化的対応が見受けられるようになってきている	身体的及び精神的ストレスの原因を適切に処理するために必要な言語的、文化的対応が一貫して見受けられる	身体的及び精神的ストレスの原因を適切かつ自然に無理なく処理するために必要な言語的、文化的対応が一貫して見受けられる
------------------------------	---	---	---

#### 目的に対応した処理の総合評価

- 起点言語のメッセージを正しく伝えている
- 起点言語のメッセージを歪めている

### 談話(ディスコース)レベルの処理(プロセッシング)

談話レベルでの結束性と一貫性を確保する様子がほとんど、あるいは全く見受けられない	談話レベルでの結束性と一貫性を確保するために必要な言語的、文化的対応が見受けられるようになってきている	談話レベルでの結束性と一貫性を確保するために必要な言語的、文化的対応が常に見受けられる	談話レベルで適切かつ自然に無理なく結束性と一貫性を確保するために必要な言語的、文化的対応が常に見受けられる
--	---	---	---

#### 総合的な談話レベルの処理の評価

- 起点言語のメッセージを正しく伝えている
- 起点言語のメッセージを歪めている

## Interpretation Outcomes Competencies Rubrics

<b>BEGINNING PRESENCE</b> little evidence of control	<b>EMERGING PRESENCE</b> consistent evidence of external control	<b>STRONG PRESENCE</b> consistent pattern of developing internalized control	<b>MATURE PRESENCE</b> task is accomplished effortlessly; self-regulation
---	---	---	--

**CONTENT**

little evidence of content equivalence	emerging evidence of linguistic and cultural behaviors that create content equivalence	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately create content equivalence	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that create content equivalence appropriately and effortlessly
--	--	--	---

**Overall CONTENT**

- supports the source message
- skews the source message

**INTENT**

little evidence of linguistic and cultural behaviors that convey message intent	emerging evidence of linguistic and cultural behaviors that convey message intent	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that convey message intent appropriately	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that convey message intent appropriately and effortlessly
---	---	---	--

**Overall INTENT CONVEYED**

- supports the source message
- skews the source message

The IEP Outcomes Project is a cooperative venture of the Interpreter Education Programs at:  
 Northeastern Univ., Univ. of Southern Maine, Univ. of New Hampshire,  
 St. Catherine's Univ., Eastern Kentucky Univ., NTID  
 Outcomes Project is sponsored in part by NIEC, RSA#H160B050002



### 通訳成果の評価項目(ルブリック)

<b>入門レベル</b> 統制(コントロール)がほとんど確認できない	<b>発展レベル</b> 外的統制が一貫して確認できる	<b>実践レベル</b> 内的統制を一貫したパターンで生み出すことができる	<b>熟練レベル</b> タスクを軽々とこなす。自己統制ができている
---------------------------------------	--------------------------------	--	---------------------------------------

#### 内容(コンテンツ)

通訳内容の等価性がほとんど見受けられない	通訳内容の等価性を確保するために必要な言語的、文化的対応が見受けられるようになってきている	通訳内容の等価性を適切に確保するために必要な言語的、文化的対応が常に見受けられる	通訳内容の等価性を適切かつ自然に無理なく確保するために必要な言語的、文化的対応が常に見受けられる
----------------------	---	--	--

#### 総合的な内容の評価

- 起点言語のメッセージを正しく伝えている
- 起点言語のメッセージを歪めている

#### 意図(インテント)

メッセージの意図を伝えるための言語的、文化的対応がほとんど見受けられない	メッセージの意図を伝えるための言語的、文化的対応が見受けられるようになってきている	メッセージの意図を適切に伝えるための言語的、文化的対応が常に見受けられる	メッセージの意図を適切かつ自然に無理なく伝えるための言語的、文化的対応が常に見受けられる
--------------------------------------	---	--------------------------------------	--

#### 総合的に伝えられた意図の評価

- 起点言語のメッセージを正しく伝えている
- 起点言語のメッセージを歪めている

## Language Outcomes Competencies Rubrics

<b>BEGINNING PRESENCE</b> little evidence of control	<b>EMERGING PRESENCE</b> consistent evidence of external control	<b>STRONG PRESENCE</b> consistent pattern of developing internalized control	<b>MATURE PRESENCE</b> task is accomplished effortlessly; self-regulation
---	---	---	--

### Articulation

#### ASL Lexical level

little evidence of appropriate sign articulation	emerging evidence of appropriate sign articulation	consistent evidence of appropriate sign articulation	consistent evidence of signs articulated appropriately, effortlessly and <i>with presence</i> for identified interactants
--	--	--	---

#### English Lexical level

little evidence of appropriate word articulation	emerging evidence of appropriate word articulation	consistent evidence of appropriate word articulation	consistent evidence of words articulated appropriately, effortlessly and <i>with presence</i> identified interactants
--	--	--	---

#### ASL Prosodic level

Little evidence of appropriate rhythm and flow of utterances	emerging evidence of appropriate rhythm and flow of utterances	consistent evidence of appropriate rhythm and flow of utterances	consistent evidence of utterances produced effortlessly with appropriate rhythm and flow
--	--	--	--

#### English Prosodic level

Little evidence of appropriate rhythm and flow of utterances	emerging evidence of appropriate rhythm and flow of utterances	consistent evidence of appropriate rhythm and flow of utterances	consistent evidence of utterances produced effortlessly with appropriate rhythm and flow
--	--	--	--

- Overall ARTICULATION     supports the source message  
 skews the source message

The JEP Outcomes Project is a cooperative venture of the Interpreter Education Programs at:  
 Northeastern Univ., Univ. of Southern Maine, Univ. of New Hampshire,  
 St. Catherine's Univ., Eastern Kentucky Univ., NTID  
 Outcomes Project is sponsored in part by NIEC, RSA#H160B050002

### 通訳成果の評価項目(ルブリック)

<b>入門レベル</b> 統制(コントロール)がほとんど確認できない	<b>発展レベル</b> 外的統制が一貫して確認できる	<b>実践レベル</b> 内的統制を一貫したパターンで生み出すことができる	<b>熟練レベル</b> タスクを軽々とこなす。自己統制ができている
---------------------------------------	--------------------------------	--	---------------------------------------

### 明確な表現 (アーティキュレーション)

#### ASL の語彙レベル

手話単語の適切な表出がほとんど見受けられない	手話単語の適切な表出が見受けられるようになってきている	手話単語の適切な表出が常に見受けられる	対象者のために適切かつ自然で無理のない、存在感のある手話単語の表出が常に見受けられる
------------------------	-----------------------------	---------------------	--

#### 英語の語彙レベル

単語の適切な発音がほとんど見受けられない	単語の適切な発音が見受けられるようになってきている	単語の適切な発音が常に見受けられる	対象者のために適切かつ自然で無理のない、存在感のある単語の発音が常に見受けられる
----------------------	---------------------------	-------------------	--

#### ASL の韻律レベル(プロソディ)

適切なリズム、表現の流れがほとんど見受けられない	適切なリズム、表現の流れが見受けられるようになってきている	適切なリズム、表現の流れが常に見受けられる	適切かつ自然で無理のないリズムと表現の流れが常に見受けられる
--------------------------	-------------------------------	-----------------------	--------------------------------

#### 英語の韻律レベル

適切なリズム、表現の流れがほとんど見受けられない	適切なリズム、表現の流れが見受けられるようになってきている	適切なリズム、表現の流れが常に見受けられる	適切かつ自然で無理のないリズムと表現の流れが常に見受けられる
--------------------------	-------------------------------	-----------------------	--------------------------------

#### 総合的なアーティキュレーションの評価

- 起点言語のメッセージを正しく伝えている
- 起点言語のメッセージを歪めている

## Language Outcomes Competencies Rubrics

<b>BEGINNING PRESENCE</b> little evidence of control	<b>EMERGING PRESENCE</b> consistent evidence of external control	<b>STRONG PRESENCE</b> consistent pattern of developing internalized control	<b>MATURE PRESENCE</b> task is accomplished effortlessly; self-regulation
---	---	---	--

**Affect**

**ASL Person Affect**

little evidence of linguistic and cultural behaviors conveying source affect	emerging evidence of linguistic and cultural behaviors that convey interactant affect	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately convey interactant affect	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately and effortlessly convey interactant affect
--	---	---	--

**English Person Affect**

little evidence of linguistic and cultural behaviors conveying interactant affect	emerging evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately convey interactant affect	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately convey interactant affect	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately and effortlessly convey interactant affect
---	---	---	--

**ASL Text Affect**

little evidence of linguistic and cultural behaviors conveying source affect	emerging evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately convey textual affect	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately convey textual affect	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately and effortlessly convey textual affect
--	---	---	--

**English Text Affect**

little evidence of linguistic and cultural behaviors conveying textual affect	emerging evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately convey textual affect	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately convey textual affect	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately and effortlessly convey textual affect
---	---	---	--

**Overall AFFECT**

- supports the source message
- skews the source message

The IEP Outcomes Project is a cooperative venture of the Interpreter Education Programs at:  
 Northeastern Univ., Univ. of Southern Maine, Univ. of New Hampshire,  
 St. Catherine's Univ., Eastern Kentucky Univ., NTID  
 Outcomes Project is sponsored in part by NIEC, RSA#H160B050002

通訳成果の評価項目(ルブリック)

入門レベル 統制(コントロール)がほとんど確認できない	発展レベル 外的統制が一貫して確認できる	実践レベル 内的統制を一貫したパターンで生み出すことができる	熟練レベル タスクを軽々とこなす。自己統制ができている
--------------------------------	-------------------------	-----------------------------------	--------------------------------

アフェクト(感情、情緒)

ASLにおける人の感情(アフェクト)

話者の感情を伝えるための言語的、文化的対応がほとんど見受けられない	話者の感情を伝えるための言語的・文化的対応が見受けられるようになってきている	話者の感情を適切に伝えるための言語的、文化的対応が常に見受けられる	話者の感情を適切かつ自然に無理なく伝えるための言語的、文化的対応が常に見受けられる
-----------------------------------	--	-----------------------------------	---

英語における人の感情(アフェクト)

話者の感情を伝えるための言語的、文化的対応がほとんど見受けられない	話者の感情を伝えるための言語的・文化的対応が見受けられるようになってきている	話者の感情を適切に伝えるための言語的、文化的対応が常に見受けられる	話者の感情を適切かつ自然に無理なく伝えるための言語的、文化的対応が常に見受けられる
-----------------------------------	--	-----------------------------------	---

ASLにおけるテキストの情緒(アフェクト)

テキストの情緒を伝えるための言語的、文化的対応がほとんど見受けられない	テキストの情緒を伝える為の言語的・文化的対応が見受けられるようになってきている	テキストの情緒を適切に伝えるための言語的、文化的対応が常に見受けられる	テキストの情緒を適切かつ自然に無理なく伝えるための言語的、文化的対応が常に見受けられる
-------------------------------------	---	-------------------------------------	---

英語におけるテキストの情緒(アフェクト)

テキストの情緒を伝えるための言語的、文化的対応がほとんど見受けられない	テキストの情緒を伝える為の言語的・文化的対応が見受けられるようになってきている	テキストの情緒を適切に伝えるための言語的、文化的対応が常に見受けられる	テキストの情緒を適切かつ自然に無理なく伝えるための言語的、文化的対応が常に見受けられる
-------------------------------------	---	-------------------------------------	---

総合的な感情・情緒表現の評価

- 起点言語のメッセージを正しく伝えている
- 起点言語のメッセージを歪めている

## Language Outcomes Competencies Rubrics

<b>BEGINNING PRESENCE</b> little evidence of control	<b>EMERGING PRESENCE</b> consistent evidence of external control	<b>STRONG PRESENCE</b> consistent pattern of developing internalized control	<b>MATURE PRESENCE</b> task is accomplished effortlessly; self-regulation
---	---	---	--

### Grammatical Structure

#### ASL non-manual grammatical behaviors

little evidence of ASL non-manual grammatical behaviors	emerging evidence of ASL non-manual grammatical behaviors appropriately produced	consistent evidence of ASL non-manual grammatical behaviors appropriately produced	consistent evidence of ASL non-manual grammatical behaviors appropriately and effortlessly produced
---	--	--	---

#### ASL sign order and argument structure

little evidence of ASL order and structure	emerging evidence of ASL order and structure appropriately produced	consistent evidence of ASL order and structure appropriately produced	<i>consistent evidence of ASL order and structure conveyed effortlessly</i>
--	---	---	---

#### English Syntactic constructions

little evidence of appropriate use of English syntax	emerging evidence of appropriate use of English syntax	consistent evidence of appropriate use of English syntax	<i>consistent evidence of appropriate use of English syntax effortlessly produced</i>
--	--	--	---

#### Overall GRAMMATICAL STRUCTURE

- supports the source message
- skews the source message

The IEP Outcomes Project is a cooperative venture of the Interpreter Education Programs at:  
 Northeastern Univ., Univ. of Southern Maine, Univ. of New Hampshire,  
 St. Catherine's Univ., Eastern Kentucky Univ., NTID  
 Outcomes Project is sponsored in part by NIEC, RSA#H160B050002

### 通訳成果の評価項目(ルブリック)

<b>入門レベル</b> 統制(コントロール)がほとんど確認できない	<b>発展レベル</b> 外的統制が一貫して確認できる	<b>実践レベル</b> 内的統制を一貫したパターンで生み出すことができる	<b>熟練レベル</b> タスクを軽々とこなす。自己統制ができている
---------------------------------------	--------------------------------	--	---------------------------------------

### 文法構造

#### ASL の非手指文法表現

ASL の非手指文法表現がほとんど見受けられない	ASL の非手指文法表現が適切に使用されている様子が見受けられるようになってきている	ASL の非手指文法表現が一貫して適切に使用されている様子が見受けられる	ASL の非手指文法表現が一貫して適切かつ自然に無理なく使用されている様子が見受けられる
--------------------------	--	--------------------------------------	--

#### ASL の手話語順及び項構造

ASL の語順と構造が使用されている様子がほとんど見られない	ASL の語順と構造が適切に使用されている様子が見受けられるようになってきている	ASL の語順と構造が適切に使用されている様子が一貫して見受けられる	<b>ASL の語順と構造が適切且つ自然と無理なく使用されている様子が一貫して見受けられる</b>
--------------------------------	--	------------------------------------	---

#### 英語の統語的構造

英語の統語法・構文法が正しく使用されている様子がほとんど見受けられない	英語の統語法・構文法が正しく使用されている様子が見受けられるようになってきている	英語の統語法・構文法が正しく使用されている様子が一貫して見受けられる	<b>英語の統語法・構文法が正しく且つ自然と無理なく使用されている様子が一貫して見受けられる</b>
-------------------------------------	--	------------------------------------	--

#### 総合的な文法構造の評価

- 起点言語のメッセージを正しく伝えている
- 起点言語のメッセージを歪めている

## Language Outcomes Competencies Rubrics

<b>BEGINNING PRESENCE</b> little evidence of control	<b>EMERGING PRESENCE</b> consistent evidence of external control	<b>STRONG PRESENCE</b> consistent pattern of developing internalized control	<b>MATURE PRESENCE</b> task is accomplished effortlessly; self-regulation
---	---	---	--

### CONSTRUCTED ACTION/DIALOGUE

#### ASL Direct/Indirect Dialogue

little evidence of constructed dialogue	emerging evidence of linguistic and cultural behaviors that create constructed dialogue	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately create constructed dialogue	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that create constructed dialogue appropriately and effortlessly
---	---	---	--

#### ASL Constructed Action

little evidence of constructed action	emerging evidence of linguistic and cultural behaviors that create constructed action	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately create constructed action	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that create constructed action appropriately and effortlessly
---------------------------------------	---	---	--

#### English Direct/Indirect Dialogue

little evidence of ability to render constructed dialogue/action	emerging evidence of linguistic and cultural behaviors that render constructed dialogue	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately render constructed dialogue	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that render constructed dialogue appropriately and effortlessly
--	---	---	--

### Overall CONSTRUCTED ACTION/DIALOGUE

- supports the source message
- skews the source message

The IEP Outcomes Project is a cooperative venture of the Interpreter Education Programs at:  
 Northeastern Univ., Univ. of Southern Maine, Univ. of New Hampshire,  
 St. Catherine's Univ., Eastern Kentucky Univ., NTID  
 Outcomes Project is sponsored in part by NIEC, RSA#H160B050002



### 通訳成果の評価項目(ルブリック)

<b>入門レベル</b> 統制(コントロール)がほとんど確認できない	<b>発展レベル</b> 外的統制が一貫して確認できる	<b>実践レベル</b> 内的統制を一貫したパターンで生み出すことができる	<b>熟練レベル</b> タスクを軽々とこなす。自己統制ができている
---------------------------------------	--------------------------------	--	---------------------------------------

#### 構築された動作／対話

##### ASL 直接・間接話法

対話(ダイアログ)の構築がほとんど見受けられない	対話の構築に必要な言語的、文化的対応が見受けられるようになってきている	対話の構築に必要な言語的、文化的対応が一貫して適切に行われていることが見受けられる	対話の構築に必要な言語的、文化的対応が無理なく適切に行われていることが一貫して見受けられる
--------------------------	-------------------------------------	---	---

##### ASL における構築された動き

構築された動きがほとんど見受けられない	構築された動きに必要な言語的、文化的対応が見受けられるようになってきている	構築された動きに必要な言語的、文化的対応一貫して適切に行われていることが見受けられる	構築された動きに必要な言語的、文化的対応が無理なく適切に行われていることが一貫して見受けられる
---------------------	---------------------------------------	--	---

##### 英語の直接・間接話法

対話(ダイアログ)の構築がほとんど見受けられない	対話の構築に必要な言語的、文化的対応が見受けられるようになってきている	対話の構築に必要な言語的、文化的対応が一貫して適切に行われていることが見受けられる	対話の構築に必要な言語的、文化的対応が無理なく適切に行われていることが一貫して見受けられる
--------------------------	-------------------------------------	---	---

#### 動作の構文・統語法の評価／総合的な対話

- 起点言語のメッセージを正しく伝えている
- 起点言語のメッセージを歪めている

## Language Outcomes Competencies Rubrics

<b>BEGINNING PRESENCE</b> little evidence of control	<b>EMERGING PRESENCE</b> consistent evidence of external control	<b>STRONG PRESENCE</b> consistent pattern of developing internalized control	<b>MATURE PRESENCE</b> task is accomplished effortlessly; self-regulation
---	---	---	--

### USE OF SPACE

#### ASL Use of Space

little evidence of employing spatial grammar	emerging evidence of linguistic and cultural behaviors that employ spatial grammar to render meaning in ASL	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately employ spatial grammar to render meaning in ASL	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately and effortlessly employ spatial grammar to render meaning in ASL
--	---	---	--

#### Rendering use of space

little evidence of rendering spatially created meaning into English	emerging evidence of linguistic and cultural behaviors that render spatially created meaning into English	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately render spatially created meaning into English	consistent evidence of linguistic and cultural behaviors that appropriately and effortlessly render spatially created meaning into English
---	---	---	--

#### Overall USE OF SPACE

- supports the source message
- skews the source message

The IEP Outcomes Project is a cooperative venture of the Interpreter Education Programs at:  
 Northeastern Univ., Univ. of Southern Maine, Univ. of New Hampshire,  
 St. Catherine's Univ., Eastern Kentucky Univ., NTID  
 Outcomes Project is sponsored in part by NIEC, RSA#H160B050002

### 通訳成果の評価項目(ルブリック)

<b>入門レベル</b> 統制(コントロール)がほとんど確認できない	<b>発展レベル</b> 外的統制が一貫して確認できる	<b>実践レベル</b> 内的統制を一貫したパターンで生み出すことができる	<b>熟練レベル</b> タスクを軽々とこなす。自己統制ができている
---------------------------------------	--------------------------------	--	---------------------------------------

#### 空間利用

##### ASL における空間利用

文法的な空間利用がほとんど見受けられない	ASL で意味を正しく伝えるための文法的な空間利用に必要な言語的、文化的対応が見受けられるようになってきている	ASL で意味を正しくまた適切に伝えるための文法的な空間利用に必要な言語的、文化的対応が一貫して見受けられる	ASL で意味を正しくまた適切に、そして自然に無理なく伝えるための文法的な空間利用に必要な言語的、文化的対応が一貫して見受けられる
----------------------	---	--	---

##### 空間を利用した表現の読み取り

空間的に表現された意味を英語に訳出している様子がほとんど見受けられない	空間的に表現された意味を英語に訳出するために必要な言語的、文化的対応が見受けられるようになってきている	空間的に表現された意味を適切に英語に訳出するために必要な言語的、文化的対応が一貫して見受けられる	空間的に表現された意味を適切かつ自然と無理なく英語に訳出するために必要な言語的、文化的対応が一貫して見受けられる
-------------------------------------	---	--	--

##### 総合的な空間利用の評価

- 起点言語のメッセージを正しく伝えている
- 起点言語のメッセージを歪めている



---

---

## Entry-to-Practice Competencies

(北コロラド大学 DOIT センター)

---

---

本資料「Entry-to-Practice Competencies」は、アメリカ連邦政府の資金援助を受け実施されたプロジェクトの成果である。本資料の詳細は、北コロラド大学 DOIT センターのサイト (<http://www.unco.edu/doit/>) よりダウンロードしていただくか、このプロジェクトについてまとめられた、下記書籍を参照されたい。

- ・「Entry-to-Practice Competencies」ファイル  
[http://www.unco.edu/doit/Competencies\\_brochure\\_handout.pdf](http://www.unco.edu/doit/Competencies_brochure_handout.pdf).
- ・書籍名および出版元  
Anna Witter-Marithew and Leilani J. Johnson (2005) *Toward Competent Practice : Conversations With Stakeholders*. RID  
(<https://www.rid.org/acct-app/index.cfm?action=store.main>.)

## Entry-to-Practice Competencies

### Domain 1: Theory and Knowledge Competencies

*This cluster of competencies embodies the academic foundation and world knowledge essential to effective interpretation.*

- 1.1 Demonstrate world knowledge through a discussion of current and historical events in regional, national, and international contexts and by describing systems that support society (e.g., governmental, educational, religious, social, and judicial).
- 1.2 Demonstrate knowledge of linguistics and cross-cultural and interpretation theories by discussing the implications of each for the work of interpreters in various contexts (e.g., approaches to the process and analysis of task).
- 1.3 Apply linguistics and cross-cultural and interpretation theories by analyzing a wide range of consecutive and simultaneous interpreting samples in a manner that reflects synthesis of the theoretical frameworks as they apply to the interpretations.
- 1.4 Compare and contrast linguistic characteristics in a variety of signed language interpretations.
- 1.5 Identify and discuss personal and professional demands that occur during interpreting and identify strategies leading to an effective interpretation (e.g., strategies to prevent injuries, reduce stress, ensure personal safety, use of team interpreting).
- 1.6 Discuss professional and ethical decision-making in a manner consistent with theoretical models and standard professional practice.
- 1.7 Compare and contrast majority and minority cultures in American society (e.g., social norms, values, identity markers, humor, art forms, language use, oppression).
- 1.8 Identify and discuss the major historical eras, events and figures in the D/deaf Community that impact D/deaf and hard of hearing people, and the resulting implications for interpreting (e.g., audism, Deaf President Now, Clerc, Milan).
- 1.9 Demonstrate critical analysis of current literature in the interpreting discipline by writing a research paper.

### Domain 2: Human Relations Competencies

*This cluster of interpersonal competencies fosters effective communication and productive collaboration with colleagues, consumers, and employers.*

- 2.1 Demonstrate collegiality by showing respect and courtesy to colleagues, consumers and employers, and taking responsibility for one's work.
- 2.2 Advocate for conditions of employment that safeguard the rights and welfare of consumers and interpreters.
- 2.3 Demonstrate respect for ASL, English and contact varieties of ASL by using cultural norms appropriate to each language while conversing and interpreting.
- 2.4 Recognize and respect cultural differences among individuals by demonstrating appropriate behavioral and communicative strategies both while conversing and while interpreting.  
Example: In groups comprised of D/deaf people exclusively and groups of D/deaf and hearing people, apply appropriate strategies for introductions, turn-taking, and follow-up.

## 入門から実務までの各段階において必要な能力

## 領域 1：理論と知識の能力

ここには効果的な通訳を行うために必須である学問的な基盤と世界的知識に関する能力が挙げられています：

- 1.1 地域内、国内、そして国際的な出来事（最近の出来事と歴史的な出来事）について論じ、さらに社会を支えるさまざまな制度（例：政治、教育、宗教、社会、司法）について論じることで、世界に関する知識を有することを示しなさい。
- 1.2 言語学、異文化論、そして通訳論の知識と、通訳者の職務のさまざまな面（例：通訳プロセスへの取り組み方、職務の分析など）との関わりについて論じ、これらの各分野の知識を有することを示しなさい。
- 1.3 広範に及びさまざまな逐次及び同時通訳の通訳サンプルを分析しなさい。その際に、言語学、異文化論、通訳論に基づいた分析をし、これらの理論が各通訳サンプルにどのように適用されているかを示しなさい。
- 1.4 さまざまな手話通訳の訳出結果の言語学的特徴を比較検討しなさい。
- 1.5 通訳をする際に直面する個人的及び専門的な課題（例：怪我の予防、ストレスの軽減、個人の安全確保、チーム通訳の活用など）を確認し、効果的な通訳をするためには、これらにどう対処するか説明しなさい。
- 1.6 きちんとした理論に則った、専門家に相応しい職務遂行を可能にする専門的及び倫理的な判断・決定とはどのようなものであるか論じなさい。
- 1.7 アメリカ社会のマジョリティ文化とマイノリティ文化（例：社会的規範、価値観、アイデンティティマーカー、ユーモア、芸術の形態、言語使用、迫害の状況など）を比較し、対比させなさい。
- 1.8 ろう者 (D/deaf people) 及び難聴者に影響を及ぼした、ろうコミュニティ (D/deaf Community) の歴史上の主な時代、出来事、人物を特定し、これらについて論じ、結果として通訳活動に及ぼす影響も説明しなさい。（例：オーディズム、デフプレジデントナウ運動、ローレント・クラーク、ミラノ会議など）
- 1.9 通訳の職務に関する最近の文献のリサーチレポートを書き、このような文献に対する分析的批評の能力を示しなさい。

## 領域 2：人間関係の能力

ここに挙げられている人間関係の能力は、同僚、通訳利用者、雇用者との効果的なコミュニケーションと生産的な共同体制を促進します：

- 2.1 同僚、通訳利用者、雇用者に敬意をはらい、礼儀正しく接し、責任を持って自分の仕事に取り掛かることで、同僚とともに協働する能力を有することを示しなさい。
- 2.2 通訳利用者及び通訳者の権利と福利を保障する労働条件が確保できるよう運動しなさい。
- 2.3 通訳する際及び会話を行う際に、使用している言語に適した文化的規範を使用することで、ASL、英語、他言語との接触型の ASL など、各言語に対して敬意を表していることを示しなさい。
- 2.4 会話をする際、あるいは通訳をする際に、適切と思われる行動、コミュニケーション手段を使用することで、各個人の文化的な違いを認め、それぞれに対して敬意を表していることを示しなさい。  
例：ろう者だけのグループとろう者と聴者が混在するグループにおいて、自己紹介やターンテイキング(順番交代)、フォローアップをするときにその場に適した方法を用いなさい。

- 2.5 Collaborate with participants and team members in a manner that reflects appropriate cultural norms and professional standards during all phases of assignments and implement changes where appropriate and feasible.
- 2.6 Demonstrate an understanding of professional boundaries by following generally accepted practices as defined by the code of ethical conduct.

### **Domain 3: Language Skills Competencies**

*This cluster of competencies relates to the use of American Sign Language and English.*

- 3.1 Demonstrate superior proficiency and flexibility in one's native language (L1) by effectively communicating in a wide range of situations, with speakers of various ages and backgrounds.
- 3.2 Demonstrate near-native like communicative competence and flexibility in one's second language (L2) by effectively communicating in a variety of routine personal and professional situations with native and non-native speakers of varying ages, race, gender, education, socio-economic status, and ethnicity.
- 3.3 Demonstrate advanced and effective public speaking skills in both ASL and English through the spontaneous delivery of an informal and a prepared formal presentation.

### **Domain 4: Interpreting Skills Competencies**

*This cluster of technical competencies is related to effective ASL-English interpretation of a range of subject matter in a variety of settings.*

- 4.1 Apply academic and world knowledge during consecutive interpretation using appropriate cultural adjustments, while managing internal and external factors and processes, in a manner that results in accurate and reliable interpretations in both ASL and English.  
Example: In low-risk settings with moderately technical, moderately paced monolog, the individual manages personal filters and intra-personal, environmental, logistical and situational factors by adhering to appropriate norms, rituals, and protocol.
- 4.2 Integrate academic and world knowledge during simultaneous interpretation using appropriate cultural adjustments while managing internal and external factors and processes in a manner that results in accurate and reliable interpretations in both ASL and English.
- 4.3 Analyze the effectiveness of interpreting performance generated by self and peers by applying contemporary theories of performance assessment and peer review.
- 4.4 Demonstrate the ability to effectively team interpret during consecutive and simultaneous low-risk interactional assignments.
- 4.5 Demonstrate flexibility to transliterate or interpret by observing the language use of D/deaf or hard of hearing consumers and/or make adjustments based on consumer feedback.
- 4.6 Negotiate meaning in ASL and English while interpreting in a manner that conforms to recognized linguistic, cultural and professional norms of the speaker(s).  
Examples: Identifies where breakdowns occur, applies strategies for seeking clarification in appropriate manner/at the appropriate times, and determines questions to ask to gain further meaning.
- 4.7 Demonstrate the ability to use technology and equipment specific to ASL-English interpreting.  
Examples: Video remote interpreting, video relay services, microphones.



- 2.5 通訳職務のあらゆる段階と場面において、適切な文化的規範及び専門性のある基準を用いて、参加者及びチームメンバーと協力し、適切かつ実行可能な場合は変更を加えることもしなさい。
- 2.6 倫理綱領に規定され、一般的に受け入れられている行動様式に従い、プロフェッショナルとしての職務範囲を理解していることを示しなさい。

### 領域 3：言語的能力

ここではアメリカ手話及び英語に関連する能力を挙げています：

- 3.1 さまざまな年齢及び経歴の話者と、幅広い条件下において効果的にコミュニケーションを行うことで、自分の母語（L1）について優れた熟達度と柔軟性を有することを示しなさい。
- 3.2 さまざまな年齢、人種、性別、学歴、社会経済的地位、民族性のネイティブ話者及び非ネイティブ話者と、個人的あるいは専門的な内容のさまざまな標準的場面において、第二言語（L2）で効果的なコミュニケーションを行うことで、ネイティブにほぼ匹敵するコミュニケーション能力と柔軟性を有することを示しなさい。
- 3.3 インフォーマルなプレゼンテーション（スピーチ）を即興で行い、また事前に準備されたフォーマルなプレゼンテーションを行うことで、ASL および英語の両言語において、レベルの高い、効果的なパブリックスピーキングの能力を有することを示しなさい。

### 領域 4：通訳技術の能力

ここには、さまざまな場面において幅広い題材に関する ASL-英語間の通訳を効果的に行う技術的な能力が挙げられています：

- 4.1 学術知識及び世界知識を適用し、逐次通訳を行いなさい。その際、ASL および英語の両言語において、正確で信頼性の高い訳出が得られるように、適切な文化的調整を行い、内的、外的な要因及びプロセスを処理しなさい。  
例えば、リスク要因が少なく、標準的な技術レベルの内容で、標準的なスピードのモノローグの通訳の場合、通訳者は適切な規範、慣例、礼儀作法などに従い、その場にいる各個人の特性に対応し、加えて自分自身の内的な課題、環境的課題、ロジスティックスや状況的な要因などに対応することが求められます。
- 4.2 学術知識及び世界知識を適用し、同時通訳を行いなさい。その際、ASL と英語の両言語において、正確で信頼性の高い通訳ができるよう、適切な文化的調整を行い、内的及び外的な要因やプロセスを処理しなさい。
- 4.3 近年のさまざまな通訳職務評価基準及びピアレビューの理論を活用し、自分及び同僚の通訳がどの程度効果的であったか評価しなさい。
- 4.4 リスク要因が少ない対話形式の同時通訳及び逐次通訳場面において、効果的なチーム通訳を行う能力を有することを示しなさい。
- 4.5 ろう（D/deaf）あるいは難聴の通訳利用者の言語使用を観察し、それに合わせて手指英語への置き換え、ASL への通訳などと柔軟に対応し、また利用者本人からの要望に合わせて調整できる能力を有することを示しなさい。
- 4.6 通訳中に ASL もしくは英語で語られた意味が不明な場合に、話者の言語的、文化的、専門的な規範に対応した方法でその意味を尋ねなさい。  
例えば：通訳が不可能となった部分を特定し、適切なタイミングと方法でその部分の説明を求めるときの手段を選び、説明を求めるときの質問をしなさい。
- 4.7 ASL-英語通訳に特化して必要な技術や装置を使う能力を示しなさい。  
例えば：ビデオカメラを使用しての遠隔通訳、ビデオリレーサービス、マイクロホンなど。

## Domain 5: Professionalism Competencies

*This cluster of competencies is associated with professional standards and practices.*

- 5.1 Demonstrate a commitment to career-long learning and critical self-assessment by creating an on-going professional action plan.
- 5.2 Demonstrate planning skills in preparing for assignments and flexibility in adapting to changes that arise during assignments.
- 5.3 Demonstrate self-awareness and discretion by monitoring and managing personal and professional behaviors and applying professional conflict resolution strategies when appropriate.  
Examples: Has awareness of personal filters, intrapersonal factors, and reactions to a variety of situations and subject matter. Knows when to request breaks, whether to accept assignments, how to work with a team interpreter, and facilitate replacement in a responsible manner.
- 5.4 Demonstrate professional integrity by avoiding conflicts of interest, adhering to the code of ethical conduct, and applying standard professional business practices.  
Examples: Control working conditions, set appropriate fees, perform bookkeeping.
- 5.5 Demonstrate commitment to the interpreting profession by becoming a member of and participating in professional organizations and activities.
- 5.6 Demonstrate commitment to the D/deaf Community by supporting and contributing to D/deaf-related organizations and activities.
- 5.7 Demonstrate awareness of community resources by identifying organizations and agencies that could or do serve D/deaf people.
- 5.8 Discuss state and national interpreter certification and/or licensure and the implications of these systems on the employment of interpreters.
- 5.9 Identify and discuss the scope and authority of state and federal laws impacting D/deaf people and interpreters.  
Example: Who is responsible for implementing the law, definition of who is qualified to interpret under the law.

## Reference

Witter-Merithew, A. & Johnson, L. (2005). *Toward competent practice: Conversations with stakeholders*. RID Publications: Alexandria, VA.

## 領域 5：プロフェッショナルとしての能力

ここではプロフェッショナルに求められる基準や実践に必要な能力を挙げています：

- 5.1 進行型のプロフェッショナルな行動計画を立てることで、通訳業に就いている限り学習と批判的な自己評価を継続する意志を示しなさい。
- 5.2 職務のための準備をする力と、現場で起きるさまざまな変化に対して柔軟に調整できる能力を示しなさい。
- 5.3 自分の個人的及び職務上の言動を自らチェックし、管理し、また適切な場面においては、プロフェッショナルな葛藤解決（conflict resolution）方法を適用することで、自己認識ができ、思慮分別を有することを示しなさい。  
 例えば：通訳者は自分自身が通訳に影響を与えていること、また通訳現場に居合わせる人々の関係も通訳に影響すること、そして全員がさまざまな状況や語られている題材に反応していることを認識しなければなりません。また、通訳者は休憩を求めるタイミング、業務を引き受けるべきかどうかの判断、他の通訳者とチームを組んで通訳する方法、交代を容易にする方法など、すべてにおいて責任感のある対応ができなくてはなりません。
- 5.4 個人の利害が職務上の任務遂行を困難にさせるような対立を避け、倫理綱領に忠実に従い、プロフェッショナルな職務の遂行を目指すことで、職務上の誠実さ（インテグリティ）を有することを示しなさい。  
 例：就労条件を調整する、適切な価格を設定する、帳簿をつけるなど。
- 5.5 同業の専門家の組織・団体及びその活動のメンバーに加わることで、通訳職という仕事へのコミットメント（貢献する気持ち）を表しなさい。
- 5.6 ろう者（D/deaf）関連の組織及びその活動を支援し、貢献することで、ろう者（D/deaf）コミュニティへのコミットメントを示しなさい。
- 5.7 地域内でろう者（D/deaf）へのサービスを提供する団体・機関などを確認し、地域のリソース（資源）について認識していることを示しなさい。
- 5.8 州及び国の手話通訳認定制度・登録制度について論じなさい。その際、通訳者の雇用にこれらの制度が及ぼす影響について述べなさい。
- 5.9 ろう者（D/deaf）及び手話通訳者に関する州法及び米国連邦法を挙げて、これらが規制する内容とその範囲について述べなさい。  
 例えば：法の実施に責任を負うのは誰か、法の規定では、どのような人が通訳として認められているか等。



執筆担当者

木村晴美 (国立障害者リハビリテーションセンター学院 手話通訳学科教官)  
宮澤典子 (国立障害者リハビリテーションセンター学院 手話通訳学科教官)  
吉川あゆみ (関東聴覚障害学生サポートセンター コーディネーター)  
中永亜貴子 (群馬大学 学生支援課障害学生支援室 支援専門者)  
近藤正臣 (大東文化大学 経済学部 教授)  
白澤麻弓 (筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター 准教授)  
蓮池通子 (筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター 特任助手)  
石野麻衣子 (筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター 特任研究員)

日本語訳

翻訳責任者 高木真知子

聴覚障害学生サポートネットワークの構築をめざして  
アメリカ視察「高度専門領域に対応した手話通訳の養成Ⅱ」報告書

発行日：2010年6月10日

発行：筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター  
〒305-8520

茨城県つくば市天久保3-4-15

編集：蓮池通子・石野麻衣子・白澤麻弓

企画：高等教育機関のアクセシビリティ向上を目指した筑波聴覚障害学生高等教育  
テクニカルアシスタントセンター（T-TAC）構築事業  
日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）



本視察は、平成21年度文部科学省特別教育研究費拠点形成事業「高等教育機関のアクセシビリティ向上を目指した筑波聴覚障害学生高等教育テクニカルアシスタントセンター構築事業（T-TAC）」（筑波技術大学）の一部として行われたものです。

